2121
6
292

5 森

No 13670

往古より武術を以て全國を廻歴し勇名の今よ昭々たる者又勘からず就中宮本武藏荒木吉村の如きに至つては講談家の能く之を演じ劇場に於ても又脚色興行するが故に普く人口に膾炙する處なり然るに本編の名士宮本左門之助が履歴に於る奇話珍説の多しと雖も武藏と姓を同ふし時世も稍相似たるを以て事跡大ひよ混淆し其是非を別たず偶々一夕一話爲す者あるも多くは浮妄の説に止まるなり茲に於て余の此編を著すや豈又妄談怪説ならず左門之助が生立より武藝に心を寄する間も無く親と叔父との仇敵討んと廻る國々の艱難辛苦や美事善行皆悉く蒐集して一部の冊子と做したれども淺學不才の拙筆なれば岸の珊瑚梅が香を添たる樣な文飾もせず眞面目に理由を述る而已

明治十七年孟春

岡田霞船

明治文庫

小松右膳

力士三保松

佐鈴木源藏

彦尾吉左衛門

田坂弥十郎

上

宮本左門之助
雪霜を凌ぎて薫る春の梅
情の舎主人
田九妻松尾

田九将監
田九娘八重梅

宮本左門之助武勇傳目錄

第一回　綾部藤一郎武術を練磨す
第二回　八重梅名士を慕て赤繩を結ぶ
第三回　宮本勘解由津和野ゑ仕官す
第四回　源藏凶惡を逞ふして宮本を殺す
第五回　左門之助足代山に衆人と血戰す
第六回　宮本惡狐を退治て童子を憐む
第七回　小松翁宮本に秘術を授て後難を示す
第八回　宮本天守に上りて不圖官女に見ゆ
第九回　靈夢に感じて黑島左膳宮本を救ふ
第十回　宮本龜戸村に婦女の危難を救ふ
第十一回　獵夫宮本に會して敵の居所を告
第十二回　豪商力士暗日根峠に賊難に逢ふ
第十三回　宮本寃罪を受て獄舍ゑ囚る
第十四回　義壯士獄舍に忍て宮本を諭す
第十五回　力士豪商と謀りて宮本の寃罪を訴ふ
第十六回　彦尾の深智黑白邪正を裁斷す
第十七回　彦尾の邸に夫婦兄妹奇遇に及ぶ
宮本衛守深夜に横死す
田丸將監窃に敵の手掛りを告る
鈴木源藏再度勘解由を恨む
左門之助久留米に武勇を顯す
妖狐小女と化して名士を誑す
高波村の農夫赤心を商議す
獵夫大作雪中に左門之助を救ふ
寶劍紛失して宮本寃罪を受る
姫路の天守に宮本老狐を退治す
宮本旅泊に山邊大之進を戒む
宮本岩淵山中に山鯨を殺す
左門之助强賊を討て衆人を助る
奸吏私慾に眩して宮本を亡んと謀る
菅神の靈現宮本の疑惑を解しむ
名吏訴へを容て名士を救んと決す
宮本時運を得て不圖復讎に及ふ
宮本八重梅を援て塚原左源太を殺す

目錄終

特12 568

宮本左門之助武勇傳

第一回

綾部藤一郎武術を練磨す
宮本衛守深夜に横死す

天下乱れて豪傑の現れ國治りて英雄隱るゝ雖も又泰平の世萬人に優れ千載の今日に至り其名昭々たる者豈勘しとせす开も本傳の名士宮本左門之助の履歷に於ける豐太閤隨一の忠臣加藤肥後守清正の郎等堤櫂左衛門高國の舍弟に片倉玄蕃と云ふ者あり兄と諸共に忠義を盡したりしが清正公卒去の後嫡子忠廣に仕へしも其子光政の代に至りて家斷絶す此時玄蕃は年八十に及びたれ共身躰尙壯士に優りし豪傑なるが世の盛衰を物憂思ひ嫡子藤五郎廣忠次男庄五郎忠時と俱に肥後の國玉名の里の片邊りに引籠り忠臣二君に仕へずと誓ひ親子農業を以て世を安樂に過せしが長男藤五郎に一男一女あり然るに同國八代に住す綾部勘解由と云ふは藤五郎が妻の兄にして是又大丈夫の者なりしが不幸にして嗣子の有ねば只管請ふて藤五郎の一子藤一郎未だ三才の時に貰ひ受實子も及ばぬ程に最寵愛を盡し成長爲すを娛み居しが藤一郎の稍八心を覺へし頃より好んで劍道を學び更に他藝に心を移さず居る者から勘解由は猶更大ひに悅び此子成人の上からは必ず天下に英名を轟し天晴一騎當千の士共成らんと夫婦の者心嬉敷云がまに〳〵其意に任せて置たりしが光陰矢の如き譬に洩ず何時か十五才と相成ければ養父勘解由と藤一郎に打向ひ汝ぢ幼き時より武術耳に心を碎き片時も怠りの色を見せぬと感ずるに餘りあり然れど凡そ士たる者と文武両道に優れば天下の英雄とは云難し汝ぢも美名を擧ん思はゝ傍ら文道に心を寄せよ左も無き時は和漢の事蹟に闇き耳か匹夫の勇を憑として竟に死は身をも過またん其上ならず第一に國を治る基礎をも知らずして人の上座に在る事は難し能

〻分別せぬ時は生涯の身をも過つべしと父が詞に藤一郎と始めて夢の覺たる如く蒐父の前に
両手を着嗤有難き御意なる哉私し是迄武藝を好み文道に心を寄すして空敷光陰を送り後年人
の物笑其成べきを疾くも父君の御厚志よ依り閑夜よ月を得たるが如く既ては之より何人に從
ひて教を受んが宜敷御指揮下され度と心底面に顯れければ勘解由は殊に打悅ひ然らば汝ぢに
申聞なん我兄宮本衛守と云は好て和漢の書籍に眼を晒し博學多識の者なれば其方が師と仰く
共決して不足の無き程に能く〻教を受よ迎夫より豐後杵築に在る宮本の方に書狀を出し藤一郎
の身の上を頼み度旨申遣はしければ異議無き返書の來りしに藤一郎は養父の家を離れて宮本
衛守の元に至り晝夜を分たず勉學するや一を聞ては十を知るの才學あれば僅か三年の間にし
て頗る其理を解天晴和漢の興廢を論する學識を有しければ衛守は勘解由の元に申送りけるや
う最早文道は充分ならずと雖も平常の學士に比較れば抔か一歩を讓るべき是に依て此後は再
度武道を熟達せしめんと欲するなり今泰平の世と雖も未だ諸國に大坂方の浪士の子孫が殘り
居て平穏ならぬ事耳あれば唯文弱は流んより文武を兼たる上からは何れに仕官致す共指揮す
る身分に成れば必定必ず案じ給ふなと平常の行ひより學術の進歩に至る迄詳細申送りしに綾部
夫婦の悅ひは大方ならず尚此上は幾重にも宜敷御教授下され度と厚く謝禮の書狀を出し藤一
郎が立身の時をば嬉み居たりける此時寛永二十年の春にして年已に十六才に相成ければ衛守
之藤一郎に打向最早其方等も當春に前髮を取男一人と相成べし就ては某しが祖先なる左門正
國と稱せし人は文武に秀てし人なる耳が義氣金鉄の武士よて戰場へ臨む毎には大功を現し竟
に一度の後れを取ず生涯の中自ら敵に中る事八十五度に及ひし程の者なるが曾て驕奢に耽ら
ず剛か私慾に志しを變せず老年に及んで山間に身を退き花月を以て娛みと爲し世を安樂に
暮すを以て其頃誰か云ふ共無く仙人と迄言れたりしと今汝ぢも祖先の氣象に似たるを以て今
日より衛門之助正光と名乘べし又武術の師と仰く可き者は田丸將監稱とし諸流に渉りし達人
ありて容易人と面會せず今山間に身を退きて在すれと幸ひ我等の別懇なれば其方が身上を依
願爲す可しと物語夫より衛守は左門之助を同道し初對面の禮終り具に屈歷を明し只管請ふて
劍道の指南を頼みてより田丸の家に寄宿爲しめ又其趣を肥後の八代なる綾部勘解由の元へ
取名及び再度武藝に着たるの始終を詳細申送りければ綾部は兄の厚恩を謝し尚は此上よも左
門之助が武術を熟達致せし上疾く歸宅を爲しめ度と其期を待て居たりける衛宮本は或夜の事
酒宴の席に招れて思はぬ外に酩酊し暇を告て立歸る其山路も豫てより案内知たる處も〻へ手よ
提灯を携へて餘念も無くして歸り路は四邊寂寞として音も無く物に襲はれ遠吠の犬の聲さへ
最稀に早深々と更渡り斯る折には雖にても語ふ友や星影に光る川瀬も物凄き和田川へりを過
んとす折柄一個の曲者が現れ出て聲をも掛ず肩先深く斬付たり衛守は深手を受ながち刀を拔
て立向へと最初の手疵に太刀先乱れ竟に其場へ斬伏らる又曲者は仕合よしと宮本が帶たる脇
差を奪ひ取何國へなりか逃走りぬ其翌日よ相成と昨夜云々斯々と田丸の元へ報知の來しに將
監は固り左門之助の驚歎大方ならず直樣綾部勘解由の元へ急飛脚にて申遣はし又泣居る衛守
の妻をば勵し野邊の送りを濟せしが濟ぬと横死の事にして如何なる恨を受たるより又何者の
手よ懸り斯る御最期ありしかと敵の樣子を探りける且又勘解由は杵築より急使の來りて兄宮
本が殺害されしと聞よりも夜を日よ繼 到着せしが最早野邊の送りさへ濟し後にて有ければ
感歎の中よも田丸と諸俱敵の手段を案めける然るよ衛守と一子も無く妻迎病身の者なるが其
人の最期を聞驚歎と涙の眦く暇はへ立より外に有されば勘解由は大ひに心を痛め一人にては

年を重ねしと夫より入代の住居に引移りしは豊後竹田に移りしは正保二年の四月にして左門之助十八才なり然共篤守の妻なる者は日々悲歎の念増て心も狂ひ氣も乱れ紹へて入る所なき体なるに髫齔由夫婦は謀め慰さめ今は敵の手掛りあらば物の美事に討取て冥途に在す兄君の御鬱憤を晴散せん程に必ず御心を痛め給ふな歎ならぬ共某しが屹度敵を探し出し抔此儘に生置べきと兄嫁に久美の心を慰めそより後は晝夜と無く仇たる者の手係りに心を盡して有けるが此勘解由は衛守の實の弟にして綾部と姓を改しは亂先たる者が綾部村に住し之より志しを得たるを云ふ故事に據りて斯は名乗し者なるが今實兄の横死を遂たるより茲に復姓して宮本勘解由と相改め左門之助も又宮本と改姓す却説是より先左門之助は叔父の最期を遂てより一個熟々以爲我こそ文武の道をも心得是迄上達なしたるも皆叔父君の鴻恩なり斯る恩人なる耳か正しく叔父の御最期を他所に見做して居らるべき假令敵と何者と其手係りと無きにもせよ和漢共に往古より艱難辛苦を累し未遂には仇を討得し事今も青史に昭々たり我等不肖の身なり共敵を討で置べきと拳を堅め喘を爲し一個心に諦ひを立或日勘解由の前に出私し事も叔父君より受し御恩は山より高く海より深き者なるに其御恩さへ報はぬ内今回の御最期有しに付其仇たるは何者なるか更にそぞと思ふ可き怪ひ人の非す共天知る地知るの譬もあり爭か知すに居る可きや何卒父上私しへ復讐の儀御許し給はゝ此より諸國を經廻て必ず敵を探し出し物の美事に討取て黄泉に在す叔父上の御鬱憤をば晴し度此儀を平に御免しあれと思ひ込たる詞を聞勘解由は稍と横手を拍實に天晴なる汝ぢが一言如何にも直樣此場に於て差許し度は思へ共汝ぢも未だ若年にて世上の事に疎かる耳か且又血氣に疾るを以て敵の在所を見認もせば又輕卒の擧動から不覺を取やも圖られず假令今日より發足爲す共敵の在所を忍ちに探し出すは難に非ず又某しも此程から密に工夫を凝して敵と覘ふて調なるか心を砕いて在る故に今暫時の間是乾坤の武術を練磨し田丸の先生の許に在り時の至るを相待べし然る時には仇人も自然と心を驕みを生じ又手係りを得るやも知すと父の詞に左門之助と實に最もと思ふ者から然らば父の仰に隨ひ尚此上にも武術を勵み時節の來るを待申さんと夫より再度田丸の家に歸り父の所存を述べ爲つ又其身にも武道に長し敵を討んと心願なれば何卒以前に倍優り御教授の儀を願はしと思ひ込たる形勢に田丸は愈其意を感じ如何にも今回の珍事に付ては嘸かし父御も歎き成る可し某し迚も衛守殿とは從來兄弟の如く相交り信義を俱に盡したりしか最早遠ら鬼籍に入れ會見る事も成らざるは此將監が身に取ても長歎息の外非す夫に付ても貴殿の精神實に天晴の御大望必ず本懐を遂せらる可し某し事と年已に耳順を過し上からと血氣壯の其元と曾館事を爲し得んや左は去ながら某しも俱に其場へ立臨み仇たる者へ一太刀恨み宮本氏の亡魂を慰め度とは存るなり兄んや貴君に於てをや其精神の天地に通じ必ず敵の者も知れ愛度望みを果さるべし先夫迄は身を慎み此術の外に必すしも心を動し給ふなと田丸の詞に左門之助は愈心を堅固に持武術を勵む外よりは脇眼も觸す一心に他事無く修行を致しける

第二回

八重梅名士を慕て赤繩を結ふ
田丸將監驕に敵の手掛りを告る

移來れは早咲初る梅ヶ枝を何時か慕ふて常の初音を告る蹊の面容さへいとゝ嬋ふ四方の氣色も一入と左門之助は我居室の窓を閉いて餘念なく打緘てぞ有ける此時田丸將監の娘八重梅十八は年齢も二八の春を迎へ綻ひ掛る室の梅響り床敷風情にて當時所の若者は皆見ぬ戀に焦れ一つゝ迫ては一眼逢にも見聞はし抔と咽さて其時さ高かりしが田丸は秘藏の娘故容易門へも

用さはが此八重梅は左門之助が武術修行の其爲に我家へ來り初めしより浸然に心の動き初一個胸をば焦せし者の未だ初戀の耻敷斯る事をと言出て若しや願ひの協はねば又其時は何とせん事その事に躊躇て止なん者と思へ共娘心の一筋に思ひ詰たる心から忘んとして忘られず去迚父母の側に耳事へて居れば是迄も冒寄る術も渚潮ぐ海士の小舟の楫絶へて涙に漂ふ如くなる心も茲に非ずして折に觸ては父母の間近く居らぬ隙を見て左門之助が一室の内へ忍び往んと爲るなれ共若し父母の我身をはお呼ありしもせられては此身の上は兎も角も宮本様に相濟ず何時か一日宜間も有ば密に焦る胸の裡明して見んと明暮に心を込て居たりしに時も睦月の末つ方父の將監と近邊なる鎮守の社に詣んと朝早くより起出て深山の方に趣きしが母の松尾と呼ふ者も何やら用事の有しと見へいそ〳〵表へ立出しが後に殘りし八重梅は今日ぞ日頃の胸の裡通せん者と立出て左門之助が余念無く庭の面を眺め居る後の方より忍び寄未だ詞さへ聯ぬ内左門之助は振返り離君と思へば八重梅どの如何なる御用で我居室にお忍び有しぞ今日て御双親様共お留守の様子我等に御用の在すなら疾々仰せ聞られて御引取を願ひ度若しも此場を父上にも御覽せられし其時は貴女は勿論某しも不義者なりと御疑念掛り如何あるお咎有やも知ず別段御用の在さずはお還りあれと強面も云放されて八重梅は何と詞も非ずして左門の膝に取縋り差俯いて漸々と妾の口から今更に申上るもお恥しけれど貴君が我家へお出しより想ひ初しが今日迄も焦るのみにてお咄しさへ殺りと出來ぬは何事と明暮嘆ち在たりしも今日は僥倖お双親も御他出ありし其隙と忍ひ參りし者たるを余りと云はお情ない妾の願ひ適はずば最早此世に望み無しお留め有なと身を起し馳出る様に樂慌れす左門之助と八重梅の袂を掴へ引戻し乎は御短慮なり我須臾此一言をお聞われ某し迚も岩木ならねは暮ふて下さるお志し豈強面を好申さん左はさながら小生も身不肖なれ共武術を勵み天下に武名を舉度志願且其所に大望あれは唯今お返事の相成べき又貴君迚當家の御息女我等如きと浮名の立ば生涯お身を過つべし其上ならず親御様迄我子の爲に溺し故教訓の屆ぬ處から不義密通をせし抔と人の口噂掛ては此上も無不孝ならずや某し迚も左の如く爲の道理を汲分強面者と思させに思ひ諦め給はるべし左も無き時は某しの退身致迄の事歟と御配慮下されよと其理を詰て諭さぞ斯言れては八重梅も再度返す詞なく差俯默然たり此時田丸將監は襖を開いて出來り左門之助に打向ひ天晴見上た貴殿の精神實は娘に申付御心底をば試ん爲め斯も無禮を致せたり是皆拙者の罪なれば平に御免ある可しと思ひも寄らぬ田丸の詞を呆る〻迄に驚きしが將監は尚進み寄り此御無禮を謝せんが爲め今日拙者が秘術とする一刀流の奥儀を皆傳すべしと宮本を奥の一室に伴往刀法の極意は申すに及ばず柔術劍術に至る迄傳授しければ宮本の歡ひ大方ならず其翌日に相成と田丸夫婦は左門之助が居室に徐〻入來り詞を改め述やう我等夫婦の打揃ひ罷り出しは餘の儀に御座無く實は昨日八重梅が貴君を慕ふて不圖失禮就ては拙者が其場に立出御心底を試みん爲めと申出しは是全く娘の立場を失ひて當惑爲し体なるを禊越にて我等の立聞夫故突然罷出斯はお咄し申せし者なり重ね〳〵の虚言なれ共何卒御宥恕下され度と聞て又々驚きしが此時將監夫婦の者は詞を揃へて言るやう實と娘の其元をお慕ひ申す様子は知れど御修行中なる大事の御身夫故申上さりしが思ひ掛無き昨日の仕儀然るに見上た御心底拜見致して嘸ひあり何卒娘八重梅を妻に娶て給はらは我々夫婦は申すに及ばず娘に於ても滿足す可し此儀御承知下さらずやと思ひも寄ぬ詞を聞左門之助は頭を下這は有難き御意なれ共豫て御承知ある如く身に大望を懷きし某し且又不肖の身を以て先生の御息女を戴かれんや夫のみなら

す若輩の小生此儀は御免を蒙り度と辭するを田丸は押止め其御辭退は御尤我等に於ても強て
より御志願あるは如何にも承知故に唯今進らする我所存にては決して御座無く假令幾歳を越
る共御本懷を遂たる后妻に娶て給はり候へ已に御尊父勘解由殿にも先頃拜謁致せし砌り馬渡
一 お咄し申せし處直樣御承知ありたれ共竟に今日迄打過置しが昨日娘の事よりして宜折なりと
相心待不圖お咄し申るなりと他事無き將監の詞に依り然らば御意に隨はんと左門之助が承知
の由に田丸夫婦に八重梅の悅ひ況ん方も無し此時將監は懷中より小柄一つを取出し此なる品
は其元には御承知有やと差出され何心なく取上見れば赤銅七子へ毛鐔よて狂ひ獅も凡作なら
ねば尙熟々と眺て居しか暫は是前に我叔父の帶して居られし臨差に附たる小柄よ相違御座無
く討れ給し其時に臨差のみは紛失したるか如何致して御手に入しぞ疾々仰せ聞られよと進と
雷るにそ將監は何を麁さん實は昨日鎭守の社に參詣し又神官とと入懇の儘に居間へ通て在り
し時何れの士なるか其場に來り取出せしは此なる小柄當時不用の者なれば三兩金にて購ひ呉
よと只管頼み居たれ共神官の者は不用の由饒倖我等も其場にて一見致せば豈圖らん某し迚も
衛守殿が平常帶し臨差の小柄と見覺ありたるは其奴が盜みに贈ひて金三兩を以て相求め夫よ
り刀劍の咄しよ事寄せ出所を詳細尋ねし處元持主と申するは當時石州津和野に到り龜井侯の
家臣となり鈴木何某と名乘由其奴も直に買受し品に有ねば詳細は存知居らざる樣子なりしが
强て尋る其時は又疑はれんと思ひし故何氣無くして立戻れりと始終を聞て左門之助が其悅び
は大方ならず歌の手係りを得たりしも是皆先生の御厚恩必ず忘却仕らずと濯踊爲て歡ひける

第三回

宮本勘解由津和野に仕官す
鈴木源藏再度勘解由を恨む

剣て田丸將監は宮本勘解由の元へも報知仇たる者を探索せんと書を認めて居る折しも不圖勘
解由の尋ねて來しに田丸夫婦は馳出し時候の挨拶も詞短かに誇せし後衛守が所持せし小柄を
は手に入たる始末を語り且又娘八重梅を左門之助が妻と定めし事迄も落無く茲に物語れば勘
解由の悅喜一方ならず夫より左門之助をも招き酒宴を設けて饗應し娘を以て酌をば取せ其間
に及ぶ頃勘解由は將監に打向ひ今日我等の罷り出しと其元樣共御協議ア然る上にも兎も角も
答へを致し置たる儀は小生武藝は未熟なからも津和野侯にて召抱へんと再三申込れしか未だ
確答致さぬに今回は是非にと雖ての懇望固り仕官を好まね共愚息左門が身の爲と夫是勘考致
る時は謝絶爲ずにも及ばずと未だ決心仕らす且又衛守の妻の本家は津和野藩士に之あれば旁
々縁の無きにも非ず併し貴君の御所存を相伺ひし其上と此儀御商議仕る御復藏なく其可否を
其さに仰せ聞られよと勘解由の詞に將監は思て膝を磕と拍开は又如何にも恐悅なり何ぞ異
存の御座る可き頓に御仕官然るべし幸ひなる哉只今もお話し申せし小柄の儀も元持主と申る
者は石州津和藩士にて鈴木何某と名乘由若しも其奴が衛守殿を打果したる所爲なるが旁以て
喪場合此機を失ひ給ふなと田丸が詞に宮本も心を決して竟に津和野に仕官をなせしは正保三
年の八月なりしが藩主い勘解由に一子あり武藝よ達せし趣を何時か聞し召れし故父子諸共に
仕へよと屢命を蒙るにそ今は是非なくして此言を豐後の田丸將監の元へ具さに申贈りしに
そ將監も又大ひに悅ひ直樣左門之助を呼招き書狀を示して申すやう御尊父よりの御書面にて
藩主の頻りに其元を召る、趣きに是あれば津和野藩士と相成られ武名を天下に擧給へ且又武
術も熟達爲ぬれば如何なる者に出逢共後れを取る、氣遣無し善は急の儘へあり翌日は出立せ
られよと萬端話世を致すにそ宮本は深く之を謝し其身の準備を爲したりける夫に引替八重梅

は石州津和野へ左門之助が赴く由を聞よりも一個心に歓ばず日頃慕ひし甲斐ありて焦れし君へは双親のお許ありて表向夫婦と成らるゝ嬉しさを待つ甲斐も無く津和野とやら〳〵引移られては此後に如何かお顔を見らるゝ事か去り迚妾を諸共にお後を慕ふて行事ならず如何はせんと娘氣の居室にて鬱在にける折柄母の聲として呼立られて八重梅は唄と返答も口疊しが身襟ひして立出れば父母は何時か酒宴を設け娘よ翌日は宮本氏も石州津和野へ趣かるれば其方も悦ひ此場に於て御酒のわ相手致さずや當分お目に懸れねど立身爲る其爲とお引移りに成なれば今お別れを申共決して其方は歎くまじ宮本氏にも御大望疾く果されし上からと娘を娶て末長く添遂られて下され度此儀は今より夫婦の者がお願ひ申すと述るにそ左門之助は詞を改め如何にも其儀と仰せに及ばず某し志願を果せし上は倶白髪迄添遂申さん八重梅どのにも某しを嫌ひ給はず其時の至るを何卒お待あるべし拙者に於て違變はせずと顔見合して八重梅は其一言の喜しさに思はず莞爾と打笑又恥しさ前に立顔は紅葉を茜さす娘心ぞ思ひ遣る母の松尾も傍より少しも早く宮本氏豫てのほ志願遂られて娘の安堵致すやう今より妾も所望を掛御武運の長きを願ひ升ると婿に思へば尚更に行末迄も案じつゝ夫より互ひに盃の數を累ねて四方山の話しに時を移せしが何時か其夜も更しにぞ何れも打臥す程も無くそも翌朝と相成ければ左門之助は暇を告て發足致し日數重ねて恙無く津和野に到着致せしに勘解由も大ひに打歓ひ此旨言上爲したれば侯にも深く喜悦あり て近侍の列に召出され君寵も又諸人に越しが當時津和野藩中に一刀流の達人と尊敬るゝを鼻に掛餘まで誇る白痴者あり其名を鈴木源藏とて大酒を好む其上に女色に溺るゝ者なりしか宮本親子が仕官の後は何時とは無くに藩士等は皆宮本の武藝を喜ひ言合さねど自ら鈴木が平常の品行を誹り或ひは武術に驕るを憎み大半教授迄

呆ざる前只管宮本の弟子となりしを疾くも源藏は之を知り偖こそ宮本親子の者共我門弟を欺瞞し已れが手へは入たる者か其返報は今に見よ吃度致さて置べきと佞奸邪智の曲者なれば勘解由又何か越度の有ば夫を種とし讒言せんと種ゝよ姦智を施しける扨又宮本親子の者は津和野侯の寵を受藩中の士にも親交し大ひに望みを得たる中にも豫て田丸將監より聞傳へたる一言には鈴木と名乗者なる今藩中に鈴木と云ふは両三名は有と雖も身分正さ人々なれば曾て怪む處なし察する時は源藏こそ武藝を云立御當家に召抱へられし者と開疑ふらくは彼奴先が所業なるやも圖られす如何にも爲して証據を得んと左門之助共商議なし種々に工夫を凝しける然るに鈴木源藏と已れが不品行の悪さを悟らす只管宮本勘解由を恨み其等親子の來りしより我君寵も皆奪れ如何にも無念と思ひ詰遂てこそ有ば欺き出し討果したる其上に當所を立退何れへなりと仕官をせばやと伺ふたり勘解由に於ては源藏の斯る野心の有とは知らす衛守を討し者なるか實否を篤と糺さんと日毎に萬事油斷なく心を附て居たりし折柄嫂お久美の病ひに罹り看護の者の手助よと下女一人を雇ひ入しか之なる女はお常と呼で暫時の間其前に鈴木の家に奉公せしと尋ねもせねど物語るに宜手係りと勘解由は悦ひ折々物抔遣はして下女の心を歓ばせ幾日招いて他事の話しの序に源藏が身の上をば尋ねしにお常は何の思慮も無く私し事は去年の秋鈴木様へ雇れて御奉公を致す時何れのお方か存知ませねど一個のお武家がお出ゐり頃に御酒をば出せしが御双方共貧す劣らす二升餘りも召上られ末には互ひの御自慢話し私し事は御勝手にて其お話しを伺ふ中に鈴木様の仰せには如何程學者と言れても武藝に達せぬ者抔は取るに足らざる者よして我等が先年豊後にて圍碁の勝負を致せし末思ひも寄らす口論し宮本備守と云ふ者を街路ゝ待受斬掛しゝ果も同く拔合せしが何の苦も無く討果せしとお手

十 捌もしく話しに私し事無く忍藤を以て事なく一部始終
方 を物語るに勘解由の悦ひ大方ならず左門之助に
無し早此上は明得し始末且亦聖後で我兄の敵害はれし事共より將監殿が求めたる小柄の儀を
も殿へ詳細言上して御紀綱をば顯ひし上晴て敵を討取んと宮本親子の歎びと物に譬へん樣も
無く病ひに耀りて打臥せし兄樣お久美に此旨を具に話し聞すれば病疲れたる者なれ共餘りの
事の嬉しさは枕を退て起直り最早敵を討得しごとく悦びながら勘解由に向ひ敵は鈴木源藏と
雖實に見認し上からと又今更の樣なれ共思ひ當りし事ぞあり良人衛守が存生にて未だ杵築に
在す折土州浪人の趣きにて鈴木一郎と名乘し者尋ね來りて仕官の儀を是非周旋してと達ての
依頼然共良人は人体の不良者と知られしもへ屈ぬ旨を斷られしが其後聞は中國へ趣きたりと
め樽さ故良人が横死を遂られても鈴木の所業と疑はず是迄ありし口惜さ少しも早く討果し歎
はしてと嫂が過し事共物語れば勘解由は固より左門之助も亦々大ひに打驚き偖こそ彼奴の太
惡も斯迄露顯を致せし上は聊か遲々する處に非す訴へ出んと親子の者は其手續きを爲したり
ける

第四回

源藏凶惡を逞ふして宮本を殺す
左門之助久留米より武勇を顯す

亦既宮本衛守の後室お久美には持病の癖に再發して日々重る所が中に敵は鈴木源藏と勘解由
の事は聞せしに其悦喜は一方ならず其身に於ても起直り思ひ當りし事共を物語りせし翌日より
り尚又病ひの差募り鍼灸藥餌の効驗なく黄泉の客と相成ければ宮本一家は打寄て悲歎の涙に
沈ひしが最早返らぬ事なれば手厚く埋葬の式を濟せ後懇ろに弔ひける却説鈴木源藏と勘解
由の越度を伺ひ居しが聊かなりといふ事無く日々君寵の增のみなれば愈恨み有ける内に衛守
の孀が死せしと聞き初めて然木之心付偖こそ堀等親子の者は衛守の親戚に疑ひ無し我ながら
にも竟之迄知らず居しこそ迂闊なり察する時は彼奴等の敵と覘ふ者にも非らず噫危ひ哉〳〵
疾く當地を立退て身の安全を圖るに如す又兵の與儀にも先ずる時は人を制し後る時は制せら
るゝと傍輩等も今以て我所業とは余も知るまじ然らば勘解由を討果し遺恨を晴せし其上に
後日の患へを除くと云ふは一箭兩端の計策なりと密かに遂を伺ふたり斯る事とは露知らぬ宮
本勘解由は源藏の仇たる者と見極めて訴へ出とせし折柄お久美の歿去しに悲歎を累ねて
忌引に及ひ其當分は出仕もせず我家に籠り居たりしが佛事供養の其爲に寺院へ參りし歸り路
夕日も山に影落て田の面の蛙も立返る遠山里の鐘の音も慇に籠りて告渡り提灯をさへ持ぬ身
は足元暗き木下闇然共馴し山路を急ぎて來る折こそあれ何國よりか放發けんづどんと響し砲
聲諸共勘解由は脇部は打貫れ噫と叫んで倒れたり此時一個の曲者と覺る數を押分て現れ出
しが莞爾と打笑右手に鳥銃を携へながら徐々其場へ歩行寄り苦き居たる勘解由を捕へ嬲り殺
しに爲て呉んと帶たる太刀拔放ち已に斬んと爲す折柄麓の方より雜やらか提灯片手に振照し
此方を臨んで來る者あれば見認られては一大事と彼の曲者は一目散に何へなりか逃去たり斯
知らねば左門之助と父が歸宅の遲きに依り迎ひの爲と馳來りしに豈圖らんや勘由には朱
九に染おし打倒れ苦み居たるに仰天なし疾くも膝に抱上て父上左門の參りしぞお氣を確に遊ば
十 されよ左門之助にて御座るなり敵と云ふは何者なるか樣子は如何に父上と聲を限りに呼立け
ニ れば勘解由は苦惱双眼を見開き子息なりしか遲かりたり我此處まで來る折思ひも寄らぬ後よ
一 り鳥銃を以て打拔れ此の如くに重銃を負苦み居たる其拔柄現れ出でしは源藏にて尚も斬んと

せし時に定めて汝の來るを知り逃去りたる者ならん我輩等を討んとして又々彼奴の手に懸り最期を遂る遺憾さよ吾と此儕と死る共汝らは如何なる艱苦をも凌ぎて鈴木を討果せよ父と叔父との仇なるぞ我慢憤を晴せよと言終りたる其後は早事切て答へもせず左門之助は切を爲し胸も張裂知くにて悲慟の涙留め得る道理を抱きし其儘と氣絶爲す迄歎きしか自ら心を取直し我家に屍を引取來しに斯と見るより母親は氣も半乱の知くにて泣哭悲も理りなり斯て有へき事ならねば叔母のお久美を勸りし光運寺へと埋葬しけるが母は忽ち剃髪して菩提の爲と尼に爲り光運寺へと起さける此より宮本左門之助之仇討の儀を願ひ上しに津和野侯にも驚き給ひ審解由の横死を歎かせられ速に免許の御書に正宗の名刀をさへ給はりけれは其悦ひと限り無く且又母へは生涯の手當を爲し遣す問心置なく出立せよと重ね〳〵の有難さに感涙袖を浸しける夫より旅中の備も整ひ石州津和を出立しは正保四年三月四日の事にして左門之助二十年なり之より中國を殘る方なく探索せしが敵鈴木の踪跡は知れす然らば九州を尋ねて見んと此年九月の末つ方長州赤馬ヶ關より便船し豐前の小倉に到着し其一國を尋ねしに似寄し者さへ有ざれば道を轉して筑前に到り豫て聞く當國の太宰府天滿宮は靈驗著き神にして我家代々信仰なれば余も又願掛を込ばやと直ちに太宰府に趣き菅公の神靈を拜し何卒敵を討しめ給へ此なる願願を適はせ給はゝ私の一代の其内之人の命の危ふき事を眼に觸耳へ聞く時に武術を以て救へる事は必す見透し申さすと誓ひを込て願りし耳か天拜山の半腹に登り一七日の其間水垢離を取て荒行し同所を立出筑後に渡り久留米の城下に逗留せしが其頃塚原左源太猛虎と名乘劍道の達人あり其性豪強にして大酒を好み飽迄已れが武藝に誇り門弟等にも師を見做ひ暴慢無禮の者多く頃は十一月の事にして樹々の紅葉なす山の端の景色彌增

す耳ならす小春日和に引續き日毎に暖氣なる儘に塚原を初め門弟等は紅葉を見んと打揃ひ朝早くより立出て正午過る頃横山の麓へ一同來掛る折柄宮本左門も遠方近方の景を詠めて余念なく彳み居たる後ろより一個の壯士か突當り直ちに其場へ立止り這は無禮なり其元にて武士たる道を心得られしや何れの藩士で姓名は何と貴殿は仰するそ此儘見逃し申されすと辯き立てを聞よりも後の方に扣へたる七八人の瓶集り矢庭に前後を圍ひにそ左門之助は大ひに驚き這は理不盡と思へ共言立しても益無き者共謝すに如すと小腰を屈め何れの御人か存せね共小生迂濶に彳み居り太だ失禮致したり何卒此儘お免あれと詫るに付込白痴者が尚又聲を荒らけて彳み居りて無禮せしとて憎き汝ちが一言なり突當りしを謝せすして見遁し呉れと申す共爭か此儘免す可き我々共と久留米にて其名を諸國に知られたる塚原先生の高弟なるぞ見損したるかと言ながら拳を堅めて打んと爲すに其手を捕て捻上つ這と御無躰と突放すを斯と見るより門弟等は狼藉者と罵りつゝ擒にせんと立懸るを早是非なしと揆掴み手玉の如く投出す其敏捷に恐れを爲し猶豫折柄立出しは即ち塚原左源太にて左門之助に打向ひ唯今門弟の者共が太だ粗忽の詞より不計御無禮仕り實にお詫の申さう樣なし某し事は城下に於て町道場を相開き武備の指南を仕る塚原猛虎と申者貴君も諸國御修行と慥に見取候へば又お急きの御身にあるまじ何卒拙者の茅屋なれ共御尊來を願しく且又唯今其元樣の御腕前を拜見し驚き入て御座るなり其儀手練を門弟共へ平に御教授下されなば拙者の滿足之に過す御聞屆あられよと言つゝ數人の門弟等へ一々無禮を詫させけるに左門之助も案外なる詞に却て當惑致し自分の出所姓名を具に明して諸共に無禮の段はお免あれと今は互ひに打解て請るゝ儘に塚原の宿所へこそは至りしか左源太は直に酒肴數品を取寄殊の外なる饗應し其翌日と相成ければ塚原の門人替る

〳〵宮本を敵手に試合を爲すも嘗一人として勝者なく此を見て居し塚原は心中無念と思へ共左あらぬ体にて進み出實に優れし御腕前小生如きが及ぬ共何卒お敵手下され度と身淮備なして立分るに左門之助も無禮を遮て頓て互ひに道場の右と左りへ立別れしが宮本心に思ふ樣左源太迚も腕前は高の知たる者なる可し打勝は迚手柄に成らす宜き程にして遇ひ置んと打込來るを受流し十有餘合を戰ひしが其當代に二と下らぬ左門之助が精妙なる武術に爭か及ふべき都立られて塚原は已ゝ危ふく見へけれ共左門之助は打もせす隙を見せしに左源太は得たりと打込來るを態と木太刀を受損じ肩口はつしと打しめて其盛後へ飛下り驟き入たる御手の内某し如き未熟者には遠く及ばすと一禮爲ば仕て遣つたりと塚原は口へ出さねど心に悅ひ鼻高々と動ゆかし樽の上に座を設け流れし汗を拭ながら宮本氏もお年齢よ似合す中々儘の御腕前今四五年も御修行あらば天晴熟達爲る可しと最早已れが武術よ諦り眼下に見下す体なれば宮本心に可笑く思へど左あらぬ体にて禮を遮已よ出立爲んとせしが若しや鈴木源藏の手懸りよても有らんかと思へば何も左源太の留るに任せて逗留なし門弟等へと尋ねれど曾て樣子の知れされば先當國には居らぬと見へたり然らば此地を出立せんと暇を告て宮本は久留米の城下を發足致しぬ

第五回

左門之助足代山に來人と血戰す　妖狐少女と化して名士を誑す

初娘の見もし驚さる山々や又谷川の流にも其地〳〵の風景は眺望も絶妙國々の名所古跡を探りつゝ左門之助は久留米を立出其夜旅宿の奥の間に身を横にして勞れたる足を聊か休めんと刀を片邊の床の間に指んとして不圖も鍔元をば眺るに柄鞘の緩は無其上ならす前後して掛る

靜しに不審を抱き斯る覺へ無き者を如何致して斯ならんと鞘を拂つて打眺れば還え所も如何に中身こそ未乾荒研の新刀なれば宮本の歟き大方ならす暫時は呆れて居たりしが扨は塚原左源太の我を欺き引寄置てすり換たるに相違なし彼の品こそは我君より仇討の爲め餞別に下し賜はる名刀なるを彼奴如きに奪はれては君へ申さる耳ならす我が武士道も相立す然ば此より引返し取紛さんと思ひしが自ら心を押鎮め腕拱ひて考へ見れど大小共に晝夜と無く身を離さすに所持せし者を如何なる隙の有しやと何も頭を傾け居しに漸く有て打點頃我彼の家にて勸めに任せ入湯致せし事の有しが察する時は其隙に摸換たるに疑ひ無し我名刀を取返さずんば何面目の有べきと其夜の中に馳返らんと手早く身支度致せしよ忽ち大雨の降出し物の黑白も見分らぬ暗夜の事也へ是非も無く其夜を明して宮本は一目散に馳返り塚原の宿所へ赴きけるが此時左源太を初めとして門弟數〳〵の者共は同國にても名所なる足代山に到り年忘れの一興に野試合を催す迚今朝何れも立出しと留守居の者の挨拶に然ば此より赴かんと塚原の家を立去しに最早此日も暮かゝれは余儀無く又も一夜を越し其翌日に至るが否足代山へ馳付けり又塚原左源太は廣場に幕を張廻し門弟共と左右に別れ今中食の休なるにぞ左門之助は塚原の和へし側に近附て逗留中の禮を述猪某しも貴家を立出不圖途中で先生が野試合のお催し有と聞き小生迚も拜見せんと立戻りてぞ參りしなりと宣つゝ片邊に引寄ありし刀を把て拔放ち一眼見るより宮本は已れ左源太不屆にも我等が刀を摸換て直樣帶る大膽者覺悟に及べと立上れば左源太大ひに打驚き南無三方と思へ共一足後へ飛下り小刀手早く拔放せば左右に在りし門人等の子細を知らねど一同に師の身を過ち有せじと命知すの若者共扳連〳〵斬て掛るを心得たりと宮本は奪ひ返せし正宗の名刀を以て斬巻り當るに任せる舊聲突戰忽ち四人を切倒せど

敵手は多勢の者なる故まず〳〵激烈押取圍み無二無三に斬込來るを前に現れ後に隱れ恰も飛鳥の如くにて縱横無盡に相當る其敏捷は月光石火眼にさへ留らぬ計りなり然共塚原左源太は左門之助が一人を傷り門人等と諸共に大喝叫んで斬立れば宮本迚も一生懸命薄疵を諸々に負ながら秘術を盡して戰ふ内又も五人を斬伏れど未だ塚原へ手も負さす余りは烈敷戰ひに刀の目釘の折たるにや又も弛みて拔たる者か柄のみ手元に相殘り後の名刀は左源太の肩にはつしと立も不思議や此方は宮本左門之助が是はと計り打驚き差添を拔く隙も無く危哉と思ふ其折柄幕張なせし後なる見上る如き大ひなる梅の枯木が風さへ無きに根元の方ゟ折るが否門人共の其上に地響き諸共倒れにければ何かは以て堪る可き即座に四人打潰され其余の者ゟ疵を受れど不思議や宮本一人は危ふきを逃る、耳か倒れし木にさへ觸されば其身ながらも奇なるを覺へ樹の間を潛りて逃れ出小刀を拔身構へ爲ど早塚原の門弟等は疵なき者も非ずして抗敵氣力も有されば左門之助は吐息を繼ぎ左源太は又如何せしかと其近邊を尋るに遙か離れし若木の下に正宗計り有ければ其悅喜は大方ならず手早く把上改め見るに刃に飜れし處も見へねば尙も自ら不思議を覺へ夫より山を馳下り逐一訴へ出けるが豫て塚原左源太の行跡不良の為成らず折々惡き風聞あるに取紛さんとの折柄也へ忽ち數人の捕吏を塚原方へ差向られしに最早逐電なせしと見へ家探し爲れ共見へざれば余儀無く斯と言上たり此時足代山にて手疵を負し塚原の塾生をも呼出し左源太の奸計を糺問せらるに宮本の刀を摸換たるを知る者ありて左門之助が訴へ偽り成らざる事明白なれば切德となり却て其武勇を賞され久留米の城下を來立しが宮本心に想ふやう足代山にて不思議にも梅の枯木の倒れしは如何にも奇なる事にして身情考あれば是なん筑紫太宰府なる天滿宮の某しを敬はせ給ひし者たるか左も無く致して

大木の倒る、謂れ決して無し殊に梅は天神の深く好み給ふと聞く旁以て某しの危急を憐み給ふより直ちに靈驗を現はせられ救はせられしに疑ひなしと左門之助は自ら悟り筑紫の方を遙ゟ拜し尙も武運を祈念しつ夫より諸國を巡廻し諸侯の城下へ到る毎には敵の在所を聞出さんと心を盡して索れ共曾て鈴木の行跡は知れす竟に慶安二年正月と相成けるが田丸將監の元へ久敷打絶て音信も爲ざるより兎も角尋ねて參らんと豐後杵築に赴き田丸の家に到りし處何時か他人の住家となり構への樣子も以前に變り見知らぬ者のみ居るに由り扨ゟ轉居を爲れしか何國へ移住せられしや尋ねて見んと其家に就て紀聞せと更に樣子の知れざれば大ひに望みを失ひて尙も諸方へ問合すれど知者曾て有ざるより是非なく其處を立出で二月の初め豐前中津に赴きて小倉の城下に到り此處に足を留めて鈴木の在所を探りしも手係迚も無き儘に又も殿城下にして尤も繁昌を極めし處より左門之助ゟ旅宿に到り源藏の在所を探らんと日々城下を徘徊し其月を越へ十月初旬となり小春日和の長閑さに此日も朝より旅宿を立出其處ゟ此處よと經廻る内漸次に山深く入しにぞ偖は迂濶に歩行しより斯る深山に迷ひ入り城下へ戻る路を失ひ今更何共爲る事能はず誰ゟも來らば尋ねん者と前後左右を見渡せど柏松のみは生茂り白晝さへ暗き樹を暗谷間に流る、水の音岩ゟせかれて凄然遐の宮本も當惑なし松の根元に腰打掛須臾茫然として居たりける折柄谷の細道より年は二八を稍一つ越もせしかと思敷美女なる優姿籠を背負て右手ゟは草苅鎌を携へて徐々行歩來るにぞ近付儘に宮本は詞を掛け呼止先我等は今朝ほど松山の城下を出て其所此所と見廻る内に不圖も路踏迷ふて歸路を失ひ爲に此なる山中へ行吟入りて難澁致す和女に逢こそ

僥倖なが城下へ戻る道筋は何れへ往や教へよと尋ねを受て賜女は須臾言葉も爲ずして左門之助の顔打守かゝみ居しが何やらの心に點說顯ての事に打笑ひ嘸かし旅のお武家には此山中迷ひ入りお困り爲る事ならん此地は松山の城下より八里餘りも隔てたる荒上山と申る所人家は絶へて無き耳か穗の人さへ容易は是迄來る者も無し今より城下へお歸りあるは所詮及ばぬ事なれば此より妾諸共に今四五町をお出あれ至つて手狹に在すれと我身の家か御座る故今宵一夜のお宿を爲べし翌日は松山の御城下迄是非共用事の有儘に妾の父と諸共よお歸りあれと賤女か最心切なる詞に悅び然らば和女の厚意に一夜のお世話に相成んと後に續いて行けるが彼の賤女は先に立樹の根岩角嫌ひ無く身輕に歩行其疾さ左門之助も劣らしと女の後に附隨ひ脇眼も振す急くと雖も稍共すれば其間十間程も隔るに這は殘念と馳出し凡そ四五町來かしと思へば何時か女を見失ひ餘りの事に茫然と左右を詠めて行ひ折しも年齡漸く十四五なる一人の男兒が現れ出手を携へし鎌をば打振已れ老狐迯しはせす覺悟に及へと言ながら切て懸るに宮本之一足後へ飛下り我等を指て老狐と呼は甚だ其意を得さるなり仔細を申せと呼はれ共童兒は聊か聞入す無二無三に切掛來れと左門之助は是非も無く然共敵手は農家の小兒何程の事やと携へたりし鉄骨の扇子を把て待遇しか悔り難き童兒の敏捷流石の宮本も斬立られしか際を覗つて踊り込鎌を撥しと打落し取て押へて動かせす童子よ汝ぢ如何なれは我等を差て老狐と呼ぶ某し事は旅の武士此山中へ迷ひ入り難儀致す者なるぞ疾々樣子を物語れよと捕へし手をば弛めけり

第六回

宮本惡狐を退治て童子を憐ひ
高波村の農夫赤心を商議す

亦説く宮本は童子に向ひ篤と心を落付て仔細を語れと曾問れば漸く有て頭を擡け何を隠さん私し事は高波村の農夫宇右衛門の子息宇作と申者なるが此頃荒上川の山中より折々老狐の現れ出人にも厄害を爲し村の難澁大方ならず日〻狐の在所を探り討留んと諸人の手配り爲せと影さへ見へす誰にも狐を討取者は褒美と致して五十両庄屋の旦那が呉ると云ふのて及ばぬ事とは知りながら萬一狐を仕留る時は褒美の金を貰ひし上他人手に渡した田畑を受戻さんと存知付腰庖厨を準備なし日夜を厭はす此山へ狐を討んと忍ひ入り今夜で三日三夜に及へと怪さ物の姿も見へす實と當惑致せし折柄不圖旦那のお姿を全く老狐の變化と心得斯る御不禮に及ひし事は何卒お免下されと一伍一什を物語るに左門之助も大ひに感し然らば汝ちに尋る事あり某し唯今此處へ跡蹈迷ふて來る折しも二八許りの婦人に出合路案内を爲て呉ると我等に先立歩行しか馳る共なく其疾さ竟には婦人を見失ひ須臾忙れて彳ひ折しも其方が拙者を老狐と呼切て掛るに不審を抱き思とす敵手を致せし者の察する處某しを尾深山へ引入て誑さんと爲したるへし必す今の婦女こそ汝ちの尋ぬる妖狐と覺へり疾く悟らば打取て手柄を急度致させんに遺憾なりと物語れば宇作も思はす拳を堅先如何にも仰せの婦人こそ全く狐に疑ひ無し口惜き事と吻く折柄何國共なく以前の賤女徐と其所へ歩行來て莞爾と計り打笑ひ旅のお武家よ何故に我身へ續きて來ませぬぞ余りに後れ給ひしと態々戻りて參りたり最早此身の家迚も程遠からぬ事あればお出あれと述るを聞き飽迄老狐の某しを誑さんと謀るぞ憎し先討取んと宮本は刀の柄に手を掛る此時宇作も携へし鎌を振上立向ひ女の面を一目見て和女と村の季子との如何して此所へ來ませしと忽ち詞を掛しに左門之助も案外なる宇作の体に刀も拔ず二個の様子を伺ひ居しに娘は宇作へ云るやう我身の此所まで來りしは和殿も隙て知る如く父が

長らく病ひの床に起臥さへも自由を得ず夫に付ても藥と云ふは千歳を經たる赤松の根元に生じた山菊の花を煎じて飲する時は如何なる强き疝癪も必す平癒と聞しも〻平常は來る事も無き此深山に分登り日〻探し索ひれど今に見當り申さすと身上話しを宮本と片邊に於て始終を聞き思はす横手を礑と拍能も揃ひし二個の者一個は諸人の災害を除くが爲に義を重じ一人は親の長病を癒さん爲の孝なるは實に稀なる其精心必ず二個の精神を神も感納遊され願望成就疑ひ無し就ては最早黄昏なるよ路案内を頼ひそと二人の者に請ければ宇作も之より先に立路程彼是三四町來しかと思ふ其折柄左門之助は拔手も見せず彼の賤女を切倒すに宇作と思ひ寄ざる事ゆへ驚く体を見るよりも宮本は又詞鋭く汝ち斯迄憶するぞ是なる婦人は人間ならす其方が尋る老狐なり疾仕留よと勵され尚も不審ひ折しも今迄女の姿と見へしは忽然年ふる狐と變じ手負ながらも凄じく宮本目掛て飛掛れと又も頭上へ斬付るに宇作は漸く勇氣を出し持たる鎌を取直し横腹深く三ケ所迄力の限り斬付たれば遂に其場で討留たり此時宇作は不審の晴ず旦那様には如何して慥かに老狐とお見留有りしや私し事は始めより隣家の娘よ違ひ無く聊か疑ふ所も有ねば心を弛めて倡俱に歩行し事の愚かよと呆れし体にぞ問ひけるにぞ左門之助は宇作に向ひ夫なる不審は尤もなり我等後より附從ひ婦女の姿を熟々見るに聊か怪き所と見へねど先に咄せし詞には明朝父の松山まで用事の有は同道させんと我に正しく言なから又其方へ語るよ父か長病を癒さん爲め此山中へ來し趣き斯くも詞の齟齬する耳か凹みし所の水溜りよ移りし女の形ちこそ紛らふ方無き怪獣なれば直ちよ打留申せしなり最前其方の話しよは老狐を仕留る其時は村の難儀を除きし上は褒美の金を得るとの事是より狐の屍を以て汝ちが望みを果せよと厚き詞よ打悦び狐を背負て宮本と打連立て歸りしに宇作の爺は馳出し狐

の死骸を見るよりも呆れ惘く計りにて須臾詞も無かりけり宇作は突に打向ひ有りし事共手短に物語りして宮本を父の宇右衛門は紹介すれば爺は大地に平伏て神の如く尊恭し兎も角お通り下されと親子の者は大ひに悦び是非〳〵御逗留を願ひ升ると切に請はれて宮本も急がぬ旅の事なれば其の意に隨ひ足を暫留めぬ扨又宇作と其夜の中に狐を仕留し趣きを庄屋の家に告けるに九左衛門は大ひに驚き如何に強氣の宇作なり共未だ幼年の身を以て老狐を退治る事に成る可き不審さよと思へ共來りて見れば疑は加何に疑ひも無き年を經し狐の死骸の有りしに驚き膽を冷して歸りける又翌日と相成ば高波村の諸人は宇作が狐を討留ると傳へ聞て打集ひ吾も〳〵と見物に宇右衛門方へ無集り皆々舌を卷のみなり然るに名主九左衛門と前に村中へ觸示し狐を打ば誰にても褒美と致して五十両差遣すと觸たるも忽ち違背致せし者か其沙汰曾て無き故に宇作は自ら進ひて褒美の金を給はれと申込しに九左衛門は其場に立出宇作に向ひ成る程先日某しの觸たる事は相違なけれど最早翌月の今日にて之與ふる譯には相成す此儀も錯其砌り月を越したる上からは與へぬと云ふ事迄も俱に觸たる筈なりと思ひも寄らぬ挨拶に是非なく調々立戻り斯くと委細を物語れば宇右衛門の驚き大方ならす唯忙然として詞なし斯くとは知らぬ村中の甲も乙も口々に宗作殿とそお手柄よ俄分限に成らしつたと入り來る者の詞を聞き宇右衛門親子は口惜さ堪り兼たる事なれば名主の詞を言聞て落膽爲せし形勢に皆ふ又も九左衛門が非道の所置に呆れ果其樣な腐敗根性なら名主樣たの庄屋のと尊敬事と少しも無し狐を退治て貰ふた上は村一同の歡ひなれは此より名主の家に押掛假令月を越せば迎褒美を與ぬ謂れ無し村中寄ちす打揃ひ宇作殿の爲めなれば庄屋の旦那へ談判す可しと一個が言ば一同が如何にも其樣なら我等も共に褒美の金を出させんと忽相談整ひけるに中より老人の進み出斯く皆の衆のお詞なれど庄屋殿は強情にて一旦遣らぬと言れては決して聞ぬ性質ゆへ大勢揃つて行れて之却て立腹爲る可し左右なる時とお互ひに心地も惡く爲ねば成らず夫より事を村の衆が何程宛でも集金して宇作殿に進せたなら皆の衆の心も立又名主殿が聞れたなら後より褒美を出すかも知れす又出さぬ共恥るべし私は何樣に存知たなれど如何の者やと言出れば集り居たる人〻は何れも其意に隨ひて成る程甚兵衛殿が言る〻通り强情我慢の九左衛門殿も容易承知と致すまじ其より銘〻僅宛でも金を集めて進せる事が宇作親子の爲なりと忽ち相談一決して金十両を取纏め宇右衛門方へ贈りしより其悦ひは一方ならす夫に引替九左衛門が名主を勤る身で在りながら道に外れた行ひと親子の者は咳き居たり此なる始終の事共を左門之助は逐一聞取村一同の心切なるを感じ且又名主の非道を憎み自ら懐中より金十両を取出し宇作親子を呼寄て是は甚だ些少なれ共我等が寸志受納よ汝ち幼き身を以て諸人に秀でし擧動は我感するに餘り有り尚は此上にも孝と義と必す忘却致さぬ樣心に留て守る可し夫に付ても老狐の屍は何れへなりと葬り遣るべし我等も急がぬ旅なれ共尚は逗留して益無き某し御緣も有れば又此後面會致すで御座らうと暇を告て立別れ土州を差て發足致しぬ宇右衛門親子は宮本を國界まで見送り別れを告て歸りし後惠みを受し金子にて田地を求めて農業を愈勵みて在ける

第七回

小松翁宮本に秘術を授て後難を示す　獵夫大作雪中に左門之助を救ふ

仇を尋る旅の空何國を當と云ふも無く左門之助は此年十月下旬に及び土佐國足摺山に到りしが此地は名高き高山にて麓に至れば蒼海漠々たる大海原要害尤も勝れし地なるが此山中に住

居を爲す小松右膳と云ふ者あり易學に通じ繪餘の術に長じ其頃有名の人なれば左門之助は此に便り武術の程も試んと漸くにして尋ね當面會の儀を申入れば頓ての事に主人と見へ年齢已に七十近く銀の如き白髮は肩に掛り鬚は胸の下を過き鹿の皮にて造りたる胴服を上に着し右手に一冊の書籍を携へ徐ろ歩行出たるが宮本の面を熟々詠め貫所は何れの御人か知らねど天晴見上た而体格合身に大望を抱かるゝが是は必ず仇討なる可し何れにもせよ旅の御人遠慮は入らぬ此方と言葉の儘與へと入りし其体爲凡人ならず且又面を見るよりも仇討の大望ありと迄見貫し事の違はねば宮本心中大ひに驚き頓て草鞋の紐を解き足を清て翁が居室へ徐々通る其折柄頭上を目掛て何やらか飛來るに宮本は躰を變して避る間も無く又もや礫の面躰へ飛來る物の有りけるに身を沈まして受流す其勁捷に小松の翁は羽扇を把て莞爾と打笑實に天晴なる貴客の手練今の礫は老人が云附置て致せし無禮お免われと詫にぞ左門之助は頭を下け出所姓名を具に告私し事は何を隱ん翁の御先見あられし如く身に復讐の志願を抱諸國を探偵仕れ共未だ敵の踪跡は知す就ては翁の御高名諸國に溢しを以て是非拜顏を願ひし上武術の奥儀も御教授に預度と存知斯參上致せし者なりと述を聞て打悅ひ如何にも貴客の望みと有ば小太刀の秘術を授へし併し今日付處て教授致する譯には行ず四五日逗留爲よと翁の詞に宮本は一議に及ばす其意に隨ひ此處ゑ足をば留めしが或日翁は何やらか机上に凭て何と無く物案事たる体なるに左門之助は机邊に進み何もへ先生之今朝より斯く煩は敷在するか何卒仰せ聞れ度と切に請れて小松の翁は叭と計りに吐息を繼き又も宮本の面を詠め我此程より貴客の相を熟々考へ見る處天下に美名を上るなれ共二十五才に至りなバ九死に及ふ大難あり此を遁るゝ其時は敵も首尾克討取ならんが忽くは此災害に身を過つ事無きにも非ず能々萬事に注意して死地

に陷る事勿れ神の助を受すんは太だ危き事のみ有り且又敵を討得る共累て仇を討すんは難き事の來らん我云ふ處偽ならねば假令何國に渡る共能々諸事に心を留輕卒の擧動は致す可らす我此のみを愛るなり必す疑ふ事勿れ就て之今日小太刀の術を免許皆傳致す可し我に續ひて來れよと庭ゑ折立出行にそ左門之助も其後より翁に隨ひ往間も非ず小松の翁は谷際の若上へ立上り見下す下は物凄き峨々たる谷の底迚も見定め難き其處へ身を踊して飛込たり這は又如何にと宮本之猶豫居たるを小松の翁之遙の下よて聲を揚續ひて來よと呼立られ左門之助も憶しはせすと兩足揃へて飛下れば翁之莞爾と打笑なから手に携へし羽扇を以て岩角目掛て撥しと打ば微塵となりて飛散けり此時翁は振返り我等が秘術は斯の如し汝ちに羽扇を受留見よと打て掛るに心得たりと鉄扇を以て受流し十有余合も打合しが翁の手練は凡ならす諸流に渉りし宮本なれ共打立られて竟に又鉄扇をさへ打落され早是迄と帶たりし小刀を拔斬て掛れど小松の翁は者共せす受つ流しつ鳥飛の如く頓ての事に不思議やな姿は消て見へすなりしに如何せしかと躊躇折柄以前の嵓上に立現て宮本來れと呼立られ飛上らんにも數十丈高き巖の上なれは唯茫然と見詰て居しに翁は又候飛下り羽扇を以て宮本の利腕發しと打よりも取て押へて動せす刎返へさんに磐石の下に成たる如くにて悶へる体を見るよりも翁はく漸手を弛め此ぞ秘傳の我術なりと先や汝に皆傳す可しと是より秘術は固り槍刀の法を教授しつ尙も再ひ身を踊せ飛上りしが程も無く左門之助の手荷物及ひ刀を其處へ持來り最早是にて事足る可し敵は當時中國に潛伏爲して在るなれ共討取る事は難かる可し兎も角探偵致して見よ再度我家へ戻りなば路程三里も遠きを以て此より三崎渡會の間を過ぎ中村より久保川通りの間道を越し高知の城下に至る可し就ては宮本其方に誓言致し置く事あり普く天下を徊歴し本懷を遂た

る其後は再度此處に尋ね來て艱苦を凌ぎ物語り我に咄し聞す可し今より樂み罷り在る必ず忘却す可からず且又前に申せし如く廿五才に至りなば其身を急度慎ひ可し是耳申聞置上は最早

三十六

故ちに用事は無し疾立去れと云ふが否又候見上る岩上へ翁は閃りと飛上りぬ左門之功は是を見て遥に三拜九拜し同所を立出聞得し如く高知へ到りて逗留し尚は近傍を徘徊して十二月の初旬となり阿波國劍山に分登りしが此日は朝より雪催寒風膚を貫く計り人家も更に見へざれば雪の降出ぬ其内に何れへなりと身を寄んと歩行を急ぎて來りしか忽ち日さへ暮掛り雪は漸山に降積りて行方の道さへ失ひけるに流石の宮本も當惑なし如何爲んと雪中に須臾躊躇其折柄雪を蹴散し大猪が宮本目懸て飛掛るに心得たりと身を反り無手と組しが猪も牙に掛んと勢ひ猛く怒り狂ふて淋じければ聊かにても手を弛めは其身の最も危きに引組たる儘上になり下になりて揉合しが愈雪は降積り五躰の凍へて働き得す竟に氣絶を致しける此所は阿州の其中にも一層險き劍山巍々たる峯を三四町谷間に下りて字さへ鬼ケ崎と稱へる所に年久敷も住居を爲し世渡る業も獵人の荒稼する大作が藁火を焚て五躰を暖ん旅のお武家の心儘に持候へ如何に〳〵と呼はりければ漸く有つて宮本は吾に返り四邊を見廻し始めて大ひに打驚き茫然として居たるにぞ大作は尚は進み寄り旅のお武家に必ず共に不審給ふは尤もながら決して疑ひ召るゝな實は先刻雪中に大猪を見認て後を追來りし所お武家には猪と諸共組たる儘氣絶致して御座る故貴客を我等が脊負つゝ死たる猪は四足を縛り牽摺來つて彼所に有り夫より種々手を盡し藥火を以て暖めしに絢蘇生有りし事なりと物語られて宮本は恰も夢の心地を爲し偖は貴殿の情に依り蘇生たる者なるか如何にも猪と組だる迄は儘に覺へ居たなれ共夫より氣絶爲しと見へ更に覺へす成たるを手厚き貴所の介抱にて蘇生致せし厚恩は謝すに詞も

御座無くと生國は勿論姓名をさへ具に明し只管恩儀を謝しければ獵人大作は宮本の出所姓名を聞と等く忽ち其身を謙遜何を隠さん私し事は肥後の國八代に出生し稍成長に及ば一時人を傷めて事六ッケ敷竟に捕縛の身と相成斬首にも成る可きを綾部勘解由樣のお情にて所刑せられる命さへ今日迄も無事なるは曽是深き御厚情今に忘却仕らす其後肥後を立去て人傳を以て伺ひしに豐後へ御移住ありしと迄承知致た分の事此山中に獵師となり已に十七年を過せ共御覽の如き賤き世渡り竟に今まで旦那樣へお禮の書狀も差上す唯徒らに打過し罪と今更如何とも申解く可き詞なし然共不圖御子息樣をお救ひ申上たるからは受し御恩の萬分の一を僅に報じ來れり併し未た旦那樣にて御機嫌宜敷渡らせけるや此儀を伺ひ奉ると面目無氣に尋ねられ思ひも寄らぬ物語りに左門之助も驚きしか又問はれたる事非を隠して益無き事なれば篝守が横死を遂たるより勘解由諸俱津和野に到り敵鈴木源藏を討んと謀り却父は討れしと逐一此に物語れば大作の驚き大方ならす須臾詞も無かりしが頓て横手を擂と拍唯今伺ふ鈴木とやらは土州の者にて先名を一郎と云申さすや若しお尋ね者のなれば當時播州姫路の城主榊原刑部太輔殿に仕へし趣き先頃得聞し事の有しと物語られて宮本は雀躍あして大ひに悦ひ如何にも賢所の言る、如く當今源藏と申共先に一郎と名乘し趣き始めは我等も知らさりしが衞守の妻が病死の際に思ひ出せし事なりと物語られしに覺へ有り且又此なる源因と〻ケ樣〳〵云々は具に仔細を語りしに大作迚も嚙を爲し兎も角二三日御保養ありて御發足こそ然る可く必ず姫路は在勤す可しと舊恩を忘れぬ大作が最懇ろに心を附强て逗留を勸るに宮本迚も雪中にて凍へ

三十七

し身なれば何處と無く身体大ひに疲れしも〻へ其意に任せて逗留して全快に及びし事も〻へ厚く謝禮を申述又の面會を互ひに約し劍山の谷間なる鬼ケ崎をは發足なし夫より中國に渡り旅中

と雖も淵藪無く其處より此處へと立籠る毎に鈴木の親子を探らつゝ、慶安三年正月七日播州姫路に籠城せしか城下は殊に繁昌し藩主と雖も最多く敵鈴木の在勤あるや其有無さへ分らねば手蔓を求めて宮本は姫路藩の足輕部屋に住込名を三之助と相改め諸事萬端に注意して此に月日を送りしに或る日同僚河田九藏と云る者三之助に打向ひ貴所も當家に住込れてより此迄平穏の勤めなれ共來る五月に至りなば遁れ難き大役あり是は定めて聞れしならん當御城内の其中にもお天守臺は知らるゝ如く四邊は草木生茂り白晝にても物凄く其上にもお太守には長壁大明神と崇る荒神其夜宿直の者にても品行不良者なれば直ちに御罰を蒙る耳か時に依つては其場に於て裂殺される事もあり且又如何なる人にもせよ二重のお櫓まで登りなば即座に命を取るゝ事我等も存知て四五人あり貴所も壯年の身なるが故に血氣に任せて櫓に上るか但し侮る心を出さば直様御罰を蒙る可し其靈驗の荒高なれば一人として恐れぬ者無く其當番に至りなば能々諸事に心を付侮りケ間敷行ひは決して致し給ふなと最心切に物語りぬ

第八回

宮本天守に上りて不圖官女に見也
寶劍紛失して宮本冤罪を受る

松桂の間に鳴狐蘭菊の叢に狂ふ寂々寥々たる姫路城中の天守臺に宮本左門之助正光は其身當番なるを以て夜半に及へと睡眠もせず夏とは雖も颯々と吹入る風も何と無く身に染々と渺寒く最凄然事なれ共曾て恐るゝ心も無く悠然として居たりしが同役河田の物語りに長壁明神と荒神にて直ちに罰を當る耳か其甚敷に至つては引裂殺す趣きなるが假令如何なる神にもせよ即座に人命を斷と云ふに最も不審の事共なり且又二重の櫓まで上りし者は其場に於て絶命爲すやは聞及ひしは尚更奇怪の事のみなり察する處此櫓に年經し狐狸の栖所と爲じ人を害ふ者なる可し余人は兎も角某しに爭か害を爲し得んや全く狐狸の所爲ならすば如何なる神を祀りし者か其神体を見届んと手に雪洞を携へながら諸所を立出宮本は四邊に心を配りつゝ二重の櫓まで上りし處更に怪き事も無けれと蜘蛛の巣計り面に掛り折〻眼に遮るは是蝙蝠の飛なる可し尚は三重の櫓をは如何にと下より覗ひ見るに天井を走る物音は鼬の鼠を逐なるか左門之助は荒爾と打笑憶病者の癖として聊かにても物音あれは必ず妖怪の所爲といひ或は神の罰なりと言觸せるが做ひなり此ある二重の櫓に上れは曾て怪き物さへ見へぬは片腹痛き事なりと獨り可笑思ひつゝ又も三重迄上りしに塵埃りは山の如く踏入難き程なれと是等の事は躊躇へき尚は雪洞を振照し正面の方を眺むれは朽果たれ共神殿の如き者これ有るに直ちに進んで扉を開き其なる中を偵ひ見れは如何なる人の木像にや衣冠正しく安座の体二躰並んで有りけるに左門之助は手を指延取出して熟々と其容貌を打詠るに織田右大臣信長公に關白豐臣秀吉公の肖像なれば之に頓首て拜を遂元の如くに納め扉を締て宮本は獨り倩々考ふるに當城こそは秀吉公の中國探題にて在せし折柄御建築の者たれは其後羽柴家の誰なるか公等の像を作り上此に祀りて置たる成らんか此所將の武功こそ本邦比類無き耳ならず智勇を兼たる名將と只管両公を追賞して須臾余念も無りしは颯と吹來る風諸共今神殿の後より徐々歩行出たるは十二一重の衣を纏ひ緋の袴をば着たる官女か左門之助は打向ひ是迄で數年の其間お天守番を勤る者は一人として此所迄登りし者の無き中に其方は能も來りし者かな我身は神に侍き申濱長と呼ふ者なり其方が勇氣を感せしより此短刀を取す可し辞退に及はず受納よと大和錦の袋に入し一品を差出すに思ひ寄さる事なれは聊か疑惑の心と無く押戴て受納宿直を

辭して宮本は宿所にこそは引取ける扨又親生獅原刑部太輔吸房殿には此年御在國にて殊に若

君よは初の端午の御節句なり迎お家の寶物小鳥丸の名劍をお床の間に飾り御武運長久を祈るか爲め御寶藏より取出し夫々係りの人々が已に御飾り附を爲んとする前夜よ至りて寶劍のみ紛失致した事なれば君へも此旨言上して一家中の人々は賊の詮議に手を盡せと忍ひ入たる所も知らず何れも奇異の事共と伺は探偵を爲れけり此時一番部屋の足輕にて宮本三之助と云る者お家の寶劍を所持爲す趣き訴へ出る者の有しに偖こそ彼奴は御當家へ近頃新參の者なれば如何なる素性か知さる奴なり取逃さすに召捕と忽數人の捕吏が吶と一度に踏込て有無をも言せず縛上糺問所へと拘引たり此時奉行早瀨内記を初として吟味役の人々は列を正く居並び在しが三之助に打向其方當家へ住込しはお家の寶劍を竊盜ん爲め奉公せしに疑無し出所姓名を具に申せよ且又伺の口よりして奥御殿へは忍び入しそ疾々白狀に及へばよし偽陳する其時は手酷き拷問に及ふ可し包隠さす申上よと嚴敷糺問を受れ共身に寸毫の覺へも無けれど其身が慥に寶劍を所持爲し居たる事なれば今更言解詞も無才智優し宮本なれ共心氣恍惚として我ながら如何なる者より受取しか今更合點の行されは眼を閉て心を碎き考へ見れと不思議にも一向覺への有さるよ言解んよも其術なく唯俯いて在る耳なれば内記は忽ち憤りを現し所詮此奴は尋常に白狀爲す可き者ならず拷問す可しと言渡せば已に准備の有りしよや忽ち木馬を率來り三之助をば是よ乘しめ左右の足よ大ひなる三つの石を縛り付車仕掛の木馬をば法廷の左右へ率廻すに何をか以て堪る可き嚮と破れて血は流れ左右の足は抜るが如く然共宮本は苦痛を忍ひ一言半句も言はねは伺又手強く拷問せられ氣絶致せは藥りを與へ蘇生致せば始めの如く斯く拷問に及ふ事遂に七日よ及へ共唯差俯て考へ居り決して一言吐されは又も早瀨は指揮をなし今回は水責に致して見んとその准備にと掛る折柄不思議なる哉忽ちに大風咄と吹起り砂石を飛す瓦ならず屋根を破り塀を倒して康しく法廷に在りし人々は驚ろき恐れて逃迷ふ此時國老黑島左膳はお家の寶刀を窃盜たる三之助と云へる足輕を日々拷問に掛る共一言半句も白狀せずと邸中の評判なれば如何なる樣子か見屆けんと法廷の別席に座を設け宮本の体を詠るに最早身躰痩衰へ見る影も無き体なるが其の人相を熟々見るに人品骨柄賤しからず決して賊を働く可き者とも覺へず且賊心の者なれば盜し品を其儘に已れが部屋に置可き樣なし假令捕縛に就く迎も直ちに逐電爲す可きを安閑として所持居るは更に合點の行さることと獨り熟々想ひし者から早瀨内記に打ち向ひ斯る暴風よ臨みては今日の吟味も成り難し四人三之助は入牢せしめよ我等も退席致さんと已に其の座を立んとする此時不思儀や宮本は忽ち閃り起直り早瀨に向つて両手を着私しても今日迄一言として申上ぬは盜みし覺への無きは勿論如何なるものより受取りしか心氣恍惚として覺へさりし今不圖も寶劍を下賜せられたる其時の事を思ひ出して御座るもの逐一言上仕らん當月三日の夜に至りお天守番の役に當り詰所に扣へて在りたれとも豫て同僚の咄しにて二重のお櫓まで上るに於ては壁明神の御罰を蒙り直ちに一命を失ふもへ必す上る事勿れ其の上あらす悔る心を出しても即座に神の御罰あり就てと謹慎敬禮して詰所の外へ出るなと堅く申し付られたるが假令如何なる神にもせよ不敬を爲ねば一命まで取る、謂れ決して非す兎も角試して見んことと二重のお櫓まで上りし所蜘蝶の巣計り而に掛り別段怪しきことも無く亦三重へ上りしに塵埃りのみ山を爲し是又奇怪のことも御座なく正面の神殿を開き御神躰をも拜せしに織田信長公と秀吉公の御本像もへ此両將を合躰して長壁明神と崇るにや最も不審と存すれ共其の儘にして私しは已にお天守を下るの際官女一人立出られ我身は神に侍き申濱長と呼ふ者なるが之まで離もお天守へ上りし者

の無き中に其方のみは恐れもせず能も此迄來りし者かな優美と致し取すべし辞退致さず受納よと袋に入し短刀を御手渡しに頂戴し其翌朝に此段を御屆申上しなば賊の御嫌疑を受さる耳かお上へお手數を掛ざる者と今更後悔仕れど其翌日は如何なる者にや終日終夜身体勞れ前後も知らず打臥たるにお捕へとなり夢の如く白狀せよと嚴重に日〻御吟味を受るが盗し覺への御座らぬ故心を碎き考ふれ共是又不審の事ながら心氣恍惚として考へ出す然るに只今忽然と飛起りたる天風にて不思議なる哉斯くに思ひ出して右の段逐一言上仕ると聊か憚る体も無く詞爽然に演ければ奉行早瀬は冷笑汝ぢ斯く迄詞を巧み賊の汚名を遁んとは片腹痛き言上なり飽まで僞り陳する上は亦拷問に及ふ可し者共準備致せよと息巻猛く言渡すを黑島左膳は内記を制し今三之助が申立るは浮妄の詞に似たれ共强ち虚言共申されす我等に於て思ふ子細の有るより今日限り三之助が糺問をば止む可し不日拙者が沙汰する迄は手厚く介抱致し置れよ此段急度申渡すと言葉の儘席を立左膳は宿所に歸りける後に早瀬は不審を抱けど國老の指揮默止難く三之助をば入牢爲しめ別段手當を致させて其夜黑島の邸へ到れば左膳は直ちに奥深き一室に於て對面し定めて貴殿も某しが所存を不審と思するおちんが拙者に於ては三之助が天守に上りし始末を聞くに渠の言立は僞りなるまじ先の城主羽柴勝俊公の其砌りお天守臺に上りし者は直樣行方の知れすなりしと其後慶長五年より池田家二代城主忠雄共留て上りし人も無く元和三年の頃よりして本多家三代寛永十六巳卯の年より松平忠明同く忠弘の両公城主たり慶安元年より松平直基同く藤松の君が城主にして此間凡そ五十餘年に及ふと雖も皆神罰を恐れてや長壁明神と崇る耳にて唯独天守の三重迄登りし者の無き事は何れも傳聞する處なり然るに足輕三之助は其事共を聞得し上に道理に拵る處を以て御神体を見屆しい爰を凡人爲し得ん哉全く正しく三重迄上りし証據は織田豐臣の両公の御本像を拜見せしと言上せしと虚言に有るまじ渠の三重に上らすは我君を初め某しにても如何なる神を崇めし者にや留て知らす如何に有る可き事なり且又當女の現れ出賞飯を與へしと云ふは如何にも奇怪の事なるが此等を以て考ふるに全く變化の所爲にして三之助をば誅し寶劍をも與へし者か左も無き時は奈何して盜み出する事の成らんや又紛失の寶刀を所持爲す上は賊名を免れ難き事なから渠の心底を推量るに決して賊を働く可き卑劣の者共思はれず全く賊心ある者なら奚ぞ盗みし寶刀を已れが部屋に飾り置く可き直ちに遁亡すべかりしを其儀も無くして在りしをそ盜を爲さる証據と他者は認定致せしなり已に賞飯も上へ返り又我君も人間藥にて盗を出する處ならねば如何にも不審と仰も有り旁以て某しが貴所の越度に成らさる樣萬事自ら引受て三之助をば免すべし此旨心得置れよと黑島左膳の詞に依り内記は異儀無く其意に應じ喰を出て立歸りぬ其翌日より藩醫海川胴庵が日々宮本を診察し手厚く治療を加へける

第九回

靈夢に感じて豐島左膳宮本を救ふ

姫路の國老豐島左膳は奉行早瀬内記の饭りに後に一個熟々以爲奇前の夜に不圖も日頃信する天滿宮の靈夢を思ひ合すれば此必ず三之助が冤罪を神の歎へよと告しめ給ふ者なる可し然れは堤を足輕如きに仕へ置く可き者なら寸尙か一の疑ひ有らば近侍の中へも教加へんと心の神に考へ居しが扨宮本も日數を累ね醫師の治療も效分なければ忽ち至快に及ひしかば左膳は大に打悅ひ或夜三之助を密に招き汝ぢ先頃お天守にて宮女に見へしと其時に寶劍をすら受納所持爲したるより嫌疑を蒙り拷問をも掛られたれ共是は其餘よりお汝ぢの所爲とは聊か存也

手如何にも不審の事なれば一時吟味を中止せしめたり就ては其方が必得に官女の姿を立出し
は如何なる者と存ずるや所存を述べ申聞よと左膳の詞に宮本は叭と計りに頭を下小生迚も今
更に何をか包み隠し申さん前の日言上致せし如く神に倚く官女にもせよお家の資劍を取出し
興べられしを考ふるに全く變化の業ならずば爭か斯る所爲の成る可き唯其上の願ひには今一
度お天守に上り妖怪變化を見屆度若し能くさる其時は如何なる嚴刑に處せらるゝも皆つて恨
み奉らずと想ひ切たる一言に左膳は直ちに免せしまゝ宮本の悅び大方ならず夫より部屋へ引
取來れば同役の足輕甲乙も三之助が盜賊なりしと打寄る毎に囁き居たれど忽ち無罪の身と相
成り歸りて來しに又驚き何れも不審を抱きしが先恙無きを祝する折柄三之助は同役の者に打
向ひ定めし諸君も某しを窃盜なりと思せしあらんが全く潔白の身なるを以て漸く赦免せられ
たり就ては尙ほも五六日お天守番を勤る間御當番の方々へは何卒拙者へ代勤を仰付られ下さ
れよと思ひ寄さる頼みに悅ひ其場に居合す人々の異議なく承知致せしに此夜からして宮本は
一個天守の詰所に至り咿か心に油斷無く夜半に及んで三重の御櫓まで上りしか更に怪き事も
なく空敷詰所へ退きしに夏の短夜の事なれば何時か其夜も明にける斯の如くする事六日に及
べと曾て妖怪の陰たに見へねは大ひに望みを失ひける然共咿か勇氣を落さず又も七日目の夜
に至り天守の三重へ上り妖怪變化の出て見よ唯一打と見搦へ爲し漸次に時を移せし處此夜に
限りて消を拂ふ松風の音さへ絶て無く夜は深々と更渡るに別段奇敷事も無けれど只管睡眠を
生する耳か俄然に寒氣を身に覺へ宛然雪中に在るが如く手足も凍る計りなり還は又不審と四
邊を見れば何時か手元の雪洞に燈火さへも消果て黑白も分たぬ深の暗此はと駭き手早くも准
備の火取を鎔出し再度燈火を照さんと手元を探れど又も奇怪や雪洞迚も有ざれば偖こそ怪魔

の所爲と見へたり還と口惜と嚙を爲し躊躇折柄能やらか上りて來る者あるに暗夜ながら宮本
は刀の柄ゑ手を懸て寄らは斬んと扣へたり待つ間も非す上りて來しは國老黑島左膳にて片手
に提灯を振照し右手に手鎗を携へたるが身丈度迚も嚴重ゑ打扮宮本の前に來るが否如何に三
之助妖怪變化の出たるか其樣子さへ今以て更に知れざる處より我等も汝ちに力を添若し怪物
の現れなば俱に打留申さん爲め深夜を冒して來りし者なり何か奇敷事は無きやと尋問を受て
宮本ゑ發と計りに頭を下還は有難し元老には深夜を厭はせ給はぬ耳か御供さへ召連給はす野
生の安否を知らんが爲御尊來こそ忝け無し就ては冒上の事こそ有り當夜に於て七夜なれ共曾
て奇怪事もなく當徒らに斯く計り宿直の如く扣へ在りしに實は先刻不審にも自然と眠氣を生
する耳か俄然に寒氣を身に覺へ驚き見れば何時にか燈火も消て暗夜となり准備の火具を出さん
にも是又手元に御座らぬ故當惑致せし其處へ御尊來に預り三之助が身に取如何計りか有難く
存し奉ると低頭平身して述ければ左膳は莞爾と打笑其謝禮には及はぬ事今其方の物語に俄然
に寒氣を催す耳か燈火も消て雪洞すら行方知れすに成しと云ふゑ如何にもなる奇事共と左膳
は其儘立上り自ら四邊を見廻せば自然と積りし塵埃の山を爲したる計りにて眼に觸る者さへ
無きに又も其場へ腰打屈め咿か油斷の体も無く亦宮本に打向ひ其方が刀は新刀なるや但し古
刀か知らね共剩れ美事の拵へなり一見せはやと謂はるゝに思はす叭と頭を下足輕風情の私し
なれば中〻御覽に供ふ可き名作にては御座らね共手細あつて當主より恩賜を受て所持爲す者
も兎もれ御一覽下されよと刀を前に差出せば左膳は取て打眺め中身を見すに差添も序に
一見致さんと刀を左手に掴り詰右手を延して宮本か帶たる小刀を取んと爲すに宮本疾くも心
附已れ妖怪逃しはせすと拔手も見せす飛掛り一擊上て斬付たれはキャッと叫んで手答せしか

今迄黒島左膳と見へし獣は忽然消失て双も暗夜と成る事か俄然に家鳴震動し魔風吹動し妖怪
り起居もなちぬ計りなり然共宮本は前もゝ事故不動なる小刀を閃かし前後左右に心を配り油
斷無くして有もける内一層烈く猛鋒を今や氏守に刺る計り又其中に線の如く面を目懸て飛來
る者は寇然霰の摧か如し此を避んにも暗夜の事も〻古今無双の宮本なれ共諸々に礫の當りし
者から面を上ん樣も無く思はず頭を垂ける折しも標縄掴んで何やらか引立行んと爲しけるに
已れ妖快覺悟をせよと振向樣に宮本は力を込て刺貫け流又も叫ひて荒廻り頭上を目懸て飛廻
るを心得たりと暗夜ながら横に躱はし一刀にて諸に其場へ切倒せど尚は妖怪と勢ひ猛く咬付
んと狂ひ廻るを仕猶しかりと一太刀益勢込て斬付たりしに何か其儘に焼る可き動と倒れて
其儘に閉へ若む休なれば拿勇氣十倍して又も數ケ所を刺貫くに漸く息の絶へけるや動めく
樣子も有されば發と計りに吐息を吐き尚も柳か袖斷無く四方に心を配りつゝ夜明を待て天守
を下り黒島左膳の邸宅に到り昨夜の始末を申入るに左膳之斯くと聞よりも直樣居室に招き又
又も始終を聞か否一度と驚き一度は感ヒ夫に付ても妖怪の疾くも悟りに已等と嘆し汝ちの到
刀を取上て咬殺さんと謀りしなちん畜生ながら恐敷工みを致す者かなと左膳は舌を巻て驚き
ける又宮本の身躰に手傷も有りやと改るに衣類は數ケ所裂たれども身内に疵のなきも不思議
や梅の青葉の數知れす身の内よりして出ければ左膳は勿論宮本も是は又如何にと打驚き互ひ
に面を見合して暫し詞もなかりける漸く有て黒島は前の夜天神の靈夢に由り汝ちの罪を知
る者から身に引受て免せし事共落なく始めて物語り就てゝ如何なる妖怪なるか此より見屈申
さんと手早く衣服を改めて若侍を相從へ白晝とは雖ども暗き天守臺の事なれば各自提灯を
振照し漸く三重の棧敷に上りて見れは白面三尾の古狐か朱に染りて死したる体に何れも驚き

恐る〻計暫時呆れて詞もなく互ひに面を見合す耳此時左膳は下知を爲し老狐の屍を莚に包み漸くにして引下し藩主へ斯くと言上せしに敢房公にも驚き給ひ且又屍を御覽わり直居る諸士も諸侯に身を震へして恐る〻計り夫より城外一里を隔て字黒木と云る處に葬らしめ祠を建て祀られたり又藩主には宮本の武勇を深く愛させ給ひ老臣黒島左膳を召し内意を申含められしに左膳と或夜宮本を私邸に招きて我君より近侍の内に加へんと已に内命を蒙りたれ共此まで其方等が本國も曾て承知もせさりしが元來流浪の身分に有まし苦からずは某しへ逐一申聞られ度將又外よ志願の非ずと當家に事へる所存はなきや胸藏のなき處をば委細に物語られ候へ此儀を問はんが爲に招きし事と聞よりも三之助は三拜なし生國及ひ本姓を具に告て扨云ふやう身に復讐の大望迚も親と叔父との仇敵討取までは何方へも仕官の成らぬ身の上あれば太守の貴命元老の仰せ迚御厚志給はる共御受爲難き拙者の身分何卒此儀お暇を下され度との一言に左膳は本意なく思へ共復讐の大望有りと聞き一箇落膳致せしが亦宮本に尋るやう其元仕官の望みを斷ち仇たる者の踪跡をば搜索せらる〻爲なるや當家の足輕と住込れしは何か仔細の有るとにや此等の譯をも某しへ物語られよと問ひ掛られ如何にも定めて元老には不審と思し給はんが今更何をか包み申さん敵と云は土州浪人鈴木源藏と云る者近頃御當家へ仕官よ及ひ罷り在るよや承知を致し實否を見屆申さんと遙々御地に到着し手蔓を以て疾くよ御足輕とは相成たれ共未た鈴木の在勤なるか某し御當家には居らぬ者にや實否と雖も今已迚探り出さず候と打明したる物語りよ左膳は聞て打驚き承知致すは初めてなるが如何にも鈴木と申者當家に仕官致して居れ共昨年臘八月頃江戸在勤を命せられ江都に出府仕れり某し事は其者に稀一二度所用の節面會致せし耳なれば鶴と面体を覺へされ共以前は土州の產なる由姓名迚も遠

はわば疑ひもなし仇人なる可し然は當地に呼寄て貴所の存意に任せんと飽まで深き左膳の精神左門之助は之を謝し其御心は有難けれ共堀も尋常の者ならず如何なる事より聞出し逃亡まとき者にも御坐なく其より窃に某しの江都に到りて討者ならば爭か仕損じ申可き決して御配慮下さるなと思ひ込たる一言に然らば貴所の御隨意たる可しと言つ〻左膳は懷中より金子の包みを取出し此は甚た些少なれ共拙者の寸志御受納あれ就ては今更の樣なれ共お尋申事のあり前の日妖狐を退治られ我等が方へ參れしに其時貴所の身内より梅の青葉の數多く出たる事なるが已に某しの靈夢と云ふは日頃信ずる天神の我枕邊に立給ひ貴殿の寃罪を救へよと告させ給ふと夢見しは前にお咄申せしが今又倩考ふるよ梅の青葉の出たるは全く神の其元を護り給ひし者ならん其証據には數ケ所衣服の裂たれ共身内に傷を受さるこ實に不思議と存するなり又貴殿にも天滿宮を信仰せらる〻者なるか此儀をお尋申度と問掛られて宮本は左膳に向つて曾ふる樣如何にも今回私しの老狐を退治致せしも神の力を得さらんにこ爭か仕留る事の能はん實は祖先の頃よりして天滿宮を信仰し且小生に至つては身に復讐の志願も御座れば旁以て祈願を込しが未だお咄し申さね共先に筑前足代山にて塚原左源太と云る者並に數多の門人等と接戰致す其砌り已に危ふき其折柄梅の枯木か忽然と多くの者の上にと倒れ討る〻處を助りしも全く神の救はせ給ふ者ならんと片時も忘る〻事は御座無く且今回の事共は別て天神の加護に依らすば討留申事の能はん一度ならず二度迄も護り給ひし有難さと筑紫の方を遙拜せば左膳も愈天滿宮の靈驗著さを感佩し尙は宮本に心を添殘る方なき誠心に左門之助は厚意を謝し且餞別にと差出せし金子を辭退致すれ共左膳の曾て免さねば其意に隨ひて受納めこ又藩主にも宮本の復讐の志願あるを以て仕官の望無き事を黒島よりの言上にて詳細聞し召れ

五し故大ひに失望せられしが頓て宮本を呼出させ手ち金子若干を賜ひ以來出入を致せよと厚き
十御詞を賜りて左門之助は有難き仕合なりとお禮を及ひ左膳へも再會を約し姫路を竟に發足せ
り

第十回

宮本龜戸村に婦女の危難を救ふ
宮本旅泊に山邊大之進を戒む

偖も宮本左門之助は姫路藩主の愛させ給ひ且又老臣黒島が厚意を以て仕官の儀も屢勸めた
る迚も身は大望を抱きし故嘱を請ふて姫路を立退其年七月中倒頃江戸表に着けるが諸侯の城
下と雖替り三都の中の大都會見る者をして眼を驚かし其繁昌譬へん方なく夫より柳原家の上
邸に到り敵鈴木を偵しに豊國らんや源藏は在勤中より不埒の事あり已に糾問せらる可きを渠も
惡事の露顯を悟り先に逐電致せりと詳細云れて宮本は一個落膽致したれ共是非なく旅宿に光
陰を送り其年を越し慶安四年正月と相成左門之助廿三才とおれり當時蹴氣打續き梅花の盛り
と聞及ひ龜戸村の天神へ參詣せばやと宮本は旅宿を疾く立出しが又此村に鎮座せる天滿宮は
筑紫太宰府に有る飛梅を以て神像を遷り當社至寶と稱するは菅公の佩せられたる天國の寶劍
なるが當時勸請の地と云ふは今の宮居より東南の方よりして耕田の中に有りし者なり今に元
宮と稱して祠あり其後寛文三年に至り當今の地に宮居を營み心字の池櫻門等總て社頭の景色
宰府の俤を摸せり同く十一年後水尾帝宸翰を遷き菅神の尊號を賜ふ文元祿十一年一社の神
事法式等宰府本宮の例に准ず可き旨仝帝の勅許を蒙りし者なり遐は贅言に似たれ共因に依つ
て茲に錄す却説宮本は神殿に跪き一心を凝して祈誓を怒願て社內を立出しに最早正午共覺
ゆるに late ある片邊の割烹店に到り中食を爲て居たりしが隣座數の客と云ふは侍二人を供

連親子と見ゆる女客其內處女と覺敷き年齡二八の春を迎へし計りの美女にて皆な中食の折柄
に何れの藩士か知らぬ共七八人か打連立又も此家に入來しが奥の一室に座を設け不行跡なる
酒宴を做し打興じてゞ居たりし中より一個か夫へ立上り奥の一室を指しつ男計りの酒宴てゞ
一向面白からぬより僥倖彼處ゝ御婦人連なり率某しが御無心申娘を借て參らんと最無遠慮に
も入來り我等は御覽せられし如く男連にて興も無し須臾の間お娘子を酌の敵手にお貸あれ此
儀をお願申さん爲め推參致せし者なりと聞て驚く處女の母親聊か席を進み出如何なる事と存
じの外思ひ寄らざる其お詞姿は人並在すれど世間知らずの處女育ちお酌を致す事さへ知らぬ
不肖者に御座り升れば此儀はお免下されと否ひを聞より武士は吶かと計り着座込其御配慮に
は及ばぬ事お育ち柄も最前より篤と伺ひ罷り在假令お酌は知られず共我等が酒宴の席へさへ
爲せぬ共暫時の間是非共に拜借致さん其爲に推參爲したる者なれば今お斷りを受れば迚おめ
〳〵廂へ返られず余り無遠慮の儀なれ共聞入給はぬ上からはお連申て參らんと近附よりて手
を捕へ立上るにゞ母親も供人諸共押隔者め賺せゞ聞はてそ又も二人の武士が現れ出て某しも
拜借致す連中なれば力を添んと駈入る体を最前よりして宮本は始終の樣子を伺ひ居しに餘り
無禮を盡せる耳か娘親子の難澁を見兼て夫へ進み出藩君は何れの御藩か知らねゞ斯く迄否ひ
御婦人を是非にと望み召るゝは御酒の上とゝ存すれゞ道に外れた御所存なり且又强てお招き
有るも別段お興に成る共覺へす又横合から某しの申出るは失禮なるが斯く云ふ拙者に御免じ
有りて彼の御婦人を召るゝ儀はお止り有て然る可く平に聞濟給はれと遮るを聞より件んの武
士は左門之助を取圍み己れ以伺闘の者なるか未た青二才の分として留立爲すてゞ片腹痛し此

奴を先へ思の根留よと言ひ立ては其余の者も悪漢人から献取と一度に喧と立掛り理非を辨せぬ無法の挙動早是非なしと宮本は蔵に進みし一人の利腕攫ひて投出し又も有手より引掴み悪る迅早速の當身に打倒せば殘りの族は一同に刀の鞘を掴ふと見へしが前後左右の差別なく斬込来るを物共せず白刃の下を甲斐潜り手玉の如く捻除る其勢堪に怖れしや七八人の若侍は始めの勢ひ何處へやら逃るもあれば踏留る者有て然ち其場に鎬りゆるに左門之助は形を改め殘りの武士に打向ひ偖は將來を警戒で其儘放ち発しける此時娘親子の者は蘇生たる心地して二個諸共進み出て両手を突頭を下民人の氏名且と又其身の名をも打明し實は今日天満宮へ参詣し其帰り路の今の大難危ふき處をお救ひ下されて何をお礼の申左右やう無く何れ邸宅へ帰りし上民人に委細申聞早速再生の御恩をば必ず報ひ奉らん何卒何れの御藩士なるや御姓名をば伺ひ度と遊るを聞て宮本は莞爾と計り打笑ひは又存外のお詞なり某し一時御難儀をお救ひ申上れば迚爭かお礼を受可きや且小手も浪士の身の上居所も定らぬ者なればお心遣ひ決して御無用其方言を慕く上は此上に餘るお志し嬉く云ふ内に若し今の無油者らが來も致さば又御難儀の有るやも知れず我等に少しもお構ひ無くお帰りあれと言ながら其身も料理の置ひを濟せ早立出ん躰なれば娘も共に進み寄り迫では御姓名を伺ひ度左も無き時と帰宅の上民人へ話しも相成難し何卒御名を聞られ度と只管請ふて是非も無く然らば拙が包み申さん石州津和野の浪士に て宮本左門之助と申者斯く姓名を申上れば最早御用も御座るまじ御縁の有ば又此後御面會に及ふべしお免しあれと言葉で其家を竟に立出けり又も續て親子の者思ひぬ時刻を移せしと料理の價茶代まで心を附て拂ひを濟せ表の方へ立出れば早宮本の影さへ見へず此時母は娘女に向ひ思ひも寄らぬ大難を逃れて無事に帰れるも宮本殿の在さずば和女は勿論妾まで如何なる憂目を見る事か知れぬ火急の難儀をも救はせられしお禮さへ娘女聞も入られず且又お年も若くして武勇の優れ給ひして並々ならぬ腕前御姓名とそ伺ひれ共お宿所はせは明されず又今夏の潔あれ共窮に お後を付て往見屋おかば幾重にも充分お禮も爲す可きに夫さへ迂濶はせざりしは妾ながらも過ても其方は如何に思ふそと娘の方を見顧れば娘も何更宮本が姿優き耳ならず其身の難を救ひたる命の親共謂つ可く且亦優れし腕前に前の恐怖も打忘れ慢身に染感風の早春心さへ覺へしに悟られまじと側へ寄り御意遊はさる如くにてお宿を伺ひ置たなら父上様と諸共にお禮に上る事も出來お招き申事もなり御恩報じも遊はされんにお殘り惜き事なりと路々互ひに語り合邸宅へこそは帰りける偖宮本は此年秋の末迄も近き諸侯の城下に到り歌の踪跡を探れ共更に手懸りも非すして亦候江戸に立帰り竟に年を越て承應元年正月と相成始めは風邪の心地とて打臥たるが漸次に病ひの重り來て醫藥の効驗も無き耳か自分あがらも危篤を覺へ最早此儘死するかと覺悟を究めて居たりしに神の救はせ給ひし者にや數人の醫師も見放したる其病ひすら日々に元へ復して遂に此年五月の初め全快致せし事なれば宮本の悦ひ大方ならず全く天神の救はせられしと自ら信じ猶も誠心を凝して祈念を込六月中旬に至りて江戸を立出此より奥羽の両國迄探らば若しや鈴木の在所をも聞出す可き事も有んと最初野州に趣き宇都宮驛に到着し其頃最屋甚兵衛とて驛中にても一二を爭ふ至つて手廣き旅籠屋あるに左門之助も宿と定め逗留致せし其日の事隣り座敷は三個の力士が旅興行の返りと見へ昼日中に取組の物語り抔爲しながら酒宴を設て居たりし折しも揉療治をば業と爲す山脇左一と呼者に成功自慢の男が來りお調取にはお療治の御用と如何と云ながら酒宴の席に入來れば力士は斯云と聞はしも然之兎もあれ試に肩の當りを揉で貰はん力の限り揉まんば我等が體は効

土七と脊を差向扣たり左一と忽ち諸手を摺肩の附か左右の腕と漸次に諸方を探ながらお闘取の體でも私が療治の一手を以て脊筋を強く撞ものなら堪へて居らるゝ事は成るまじ夫共堪へて居給ふかと思ひも寄らぬ詞を聞き力士は莞爾と打笑ひ何程療治の術にても私等が體は見らるゝ如く磐石程に練へた身躰假令如何なる術か知らねどお主位なの腕首にて力の限り撞は迚鬼へられざる樣にて世天下の力士と言れんや萬一堪へぬ其時は五両の金をお主に進せん堪へた時は療治の代も拂ひを爲ぬが承知かと言れて此方も打笑如何にも承知仕れり然らば闘取撞後に堪へず聲を出されたら五両の金を下されよと堅く約を相固め脊筋を暫時揉居たりしが頓て左一と力を込矢聲と共に撞れれば力士は痛さに堪り兼噫と叫んで倒るゝ計り此時左一は約束なりと五両の金を受納先り此体を見て傍らなる二個の力士は打笑吾こそ堪へて療治を世無代で揉して遣らんず者と替るゝに脊を出し最初の如く撞せしが何れも堪へず叫ひしに壯士遣つたりと左一は悦ひ都合十五両の金をば掠め徐々此場を立出たり三人の力士ぞ呆れ果雖茫然として居たる耳此ある樣子を最前より隣り座敷で宮本は終始の体を偵ひ居しが余りと云は彼奴こそ如何なる者か知らね共斯る所業を爲す事憎し卒某しが試して見んと左一の廊下へ出るを呼入我等も療治を御依賴申さん此又力士三人迄堪へられざる術と云ふも是又試して撞て見られよ隣り座敷の客の如く堪へ兼たる其時は同く五両を出すべし如何にと云れて左一は悦ひ又心中は想ふやう斯る柔弱の身を以て心太くも云し者かな先其儀なら飽迄も懲して呉れんと打點頭又候宮本の脊を揉さげ脊筋の左右を撫さすれり此時力士三人は各自を奪ぞれしに無念と思ふ折柄なれば三人諸共郎下に立出片唾を歇で伺ふたり又宮本は小松の翁より傳授されたる柔術の身固の法を以て呼吸を定見待せは知らぬ山脇が力を込て撞けるに不測や恰も居眠如く自若と做して居たるにぞ又も再三力の限り撞共押共驚く体あし這と口惜と立上り諸手を掛て摺と見へしが三間計り投出せり左門之助は投られ乍ら中にて疾くも起直り閃りと立て冷笑汝ぢ未熟の腕前にて斯る所業を成す事憎し最早頭は無き者なり首の廻りを改め見よと言れて不審と思へ共何心なく探りて見れば小柄を以て襟元を縫留てこそ有りけるに其早業に驚きされ共不敵の者ゆゑ恐る体無く又候摺懸るをば左門之助は取て伏宛然磐石にて押へし如く身動きならねば嚙を做し悶へ苦む体あるに宮本は聊か手を弛め尚此にても服さずば五体を微塵と爲す可きぞ如何にと言れて今更に一言半句も有はてそ首を壘に摺着て小生未熟の腕を持重ね〳〵の無禮を需し何とお詫の詞も御座無く何卒御免下され度私し事は土州浪人山邊大之進と申す者にて斯く接腹を業と做し諸國を廻るも全くは仇を尋る身の上なれど已に本國を立去て十一年に及べ共未だ敵の踪跡も知す空く光陰を送る内身に貯へし路用は費し據無く斯くの仕合寔ま悦入次第なり迚打凋れて物語る始終の樣子を聞取て我身の上に引競べ漫然に憐を催ふして又大之進に打向ひ我等も諸國を經廻りて同く仇を尋る者なり幸ひ拙者は路用も盡す今日迄は罷在る就ては先刻力士の衆より得られた金を返さる可し其代りとして某しが之を貴殿に進せんと金十両を取出し受納てと勸るに力士の者へ之金子を戻し又宮本の勸めたる金を再三否め共押返されて已ひを得す大之進は厚意を謝し竟には金を受納めり

第十一回

獵夫宮本に會して敵の居所を告
宮本岩淵山中に山鮫を殺す

扨も宮本左門之介は思ひも寄らす旅宿に於て山邊大之進が履歴を聽くに早十一年を過せ共未だ敵の手懸りも非すと聽世ま拂命の者迚は我身計りと思ひの外我より星霜を累るは又氣の毒

な躬の止と歎息なして彼更に其余の事共聞ひも爲して其夜を越し又の翌面を約し竟に祠所を立出此日原市郷に一泊し次の日日光山に上り遂に神君を伏拜み武運を祈りて神殿及び社頭の景色見る者をして眼を驚し善美を極めしは筆紙に盡す事も能はず尚は神君の御武德を追賞し其より中禪寺の庭内は勿論裏見ケ瀧給泉池を一見し光陰を累ねて奥羽兩國を往來し鈴木の行方を探れ共更に手掛りも得ざるより此年十二月を至り再度江戸に立返り又年を越て承應二年正月とこそ相成龜戸村なる天滿宮へ參詣せんと朝早くより旅宿を立出四方の景色を眺めつゝ餘念も無くして往掛る向ふの方より來りし武士往過ながら振返り若しや貴君は宮本様か左門之助様ではと御座らぬかと聲掛られて立止り又雖なるかと面を見れば先年阿州の劒山にて一命をさへ救はれたる獵人大作にて往けれは此と計り打驚き如何致して江戸表へ出府致せられし耳ならす武家奉公を致されしや何は兎もあれ此は市中幸ひ向ふの茶店に至り緩く其後の事等を物語らんと同道し一別以來の挨拶も互ひに述て頓ての事又宮本の尋るやう當時は何れへ仕官をせしや走めて都合の宜きなる可し我等は阿州を去し後貴所の詞に隨ひて播州姫路に到りし處敵鈴木は居もすして妖術の爲に盜され糧々の難儀を爲し事より奥羽の諸國を歷廻れ共未だ行方の知れざる趣き掻摘んで物語れば大作の驚き大方ならす私し事は強ちに武家奉公を好みしならねと又此難き事故ありて遂に阿州家の足輕の奉公仕は致したなれ共躰の暇と云ふ迄にて却て手馴し獵師の方が遙に增かと存知ますれ共今更是非なく今日まで勤め續いて居たりし故に斯く繁昌の江戸表を思ひ掛なく見物致しますの事が仕合と一個で存して居る耳と互に盞ね物語り其内酒肴も來りしに二人は此又て酒宴を設け尚は斯に角と餘念も無く過し事抔語りて居しが思はず大作は横呼を拍此頃私しの同僚にて加州の人と懇意の者あり屬互ひに往來をする又其者の咄しに成近き頃加賀家な仕へし者は一刀流の達人とかに て鈴木源五兵衛と名乘よし其年齡を尋しに凡そ似寄し樣子に御座ねば若し源蔵の改名して住迯たるやも圖られず兎も角お探りあるべしと聞より宮本は飛立計り遣は有難し添けなし必ず其奴に疑ひ無く我等に於ても關東及び奥羽の諸國を探れ共更に手掛りを得ざりしが一度なりす二度迄も貴所の報知に預りて鈴木の行方の知れると云ふも是又奇なる事なりと再三再四深く謝じ又の面會を互ひに約し此日は遂に別れける其より宮本は龜戸村に到り宰府天滿宮を尤拜し何卒敵を討しめ給へと一身不乱に願誓を込一七日の其間水垢離を取て行を爲し其滿願に及ぶの曉き衣冠正き一人の老人何國共なく現れ出善說に如何に宮本其方が尋る仇たる者は當時北越の先にあれ共當年彼の地へ至る時と必ず三度の大難あり且其方の身に取ては廿五才の厄なる耳か八方塞りに當るを以て必ず北國へ赴く可からず若し又此を破るよ於ては凡死に及ぶ災害あるなり未た時運の來たらねば身を慎みて在るへしと再三告しめ給ふと思へば此曉きの夢なるに左門之助は奇なるを覺へ一箇熟々以爲先よ阿州の足代山にて小松翁の警戒られしも今此夢と符合爲つれは我身に取て凶事ならんか假令廿五才の厄年なり迎仇たる者を討んと云ふ我精神を憐み給は、凶事も變して吉事と爲し首尾克敵を討しめ給へ仇の手掛得る上は一日なり共安穩に事か差置事の能はん唯此上は一命を天に任せて彼の地よ赴き探し出さで置べきと倚は天滿宮を伏拜み江戸を立出宮本は中仙道輕井澤まで來りしに是より近き間道を辿り迎旅人の教へに從ひて道を轉じて急きしに如何せしにや不思議にも大ひに路を踏迷ひ信州淺間山の麓間近く來り字岩淵と稱へたる最凄然深山の其谷合の細道へ踏入たるが此處は別て樹木の生茂り白晝と雖も淵暗く木標の者を折に觸此山中を往來はずれと旅人の通ふ路ならず

樹木の枯枝は横なり樹の落葉に蹈迷ひ嶮々巒々たる間過なるに左門之助も呆れ果て間は
んにも人影なく須臾行みて茫然たりしが斯ては果しと氣を焦燥御はも小道と思しき處を足に
任せて歩行しに岩間を傳ふて流れ出る清水を溜たる凹みし所を今往過んと爲す折柄走り出た
る怪の物が宮本目懸て噛懸るに心得たりと身を替し振より早く斬付たるが深く刀の立ぬと見
へ更に弱し体も無く益猛く荒回る其疾き譬へん様なし左門之助も一生懸命稍飛違へて挑み
し内に忽ち毒氣を受し者にや俄然に手足へ痺を生し働き自由を得さるより這は又如何せし事
か此場に於て倒なば此なる怪物に取喰はれん殘念ありと噛を爲と亦如何ともする能はす躊躇
隙の有りし者にや急き怪物は飛懸り倒るゝ處を口に咬へ引摺ながら洞穴へ已に入らんと爲す
折しも不思議や今迄宮本の五躰は痺て動き得さるも心氣舊然として我に返り勇氣十倍致せし
に持たる刀を取直し腹と覺へし其處へ柄も拳も貫徹よと突上たるに堪へ得す咬へし儘に猛り
猛ふを處擇まず刺貫けば竟に弱りて倒れける宮本足下に踏て亦も數ヶ所刺貫き漸やく仕留て
吐息を繼き引摺出して改むれば口は尖りて細長く全躰の鱗は金色を現はし其体魚類にして四
足あり其大ひなる事頭尾に至つて八尺余り左門之助も驚く耳にて如何なるを辨へす少時見詰
て居たりしか亦も倩考ふるに此山鮫とか云ふ者ならん尚蹴返して打眺め已に其場を去んと
す其時谷間の流に當り何やら音物致すにそ不思議の事よと宮本は四邊に眼を配る間もなく亦
一匹の山鮫が五六才なる小兒を咬へ此所へと駈來しに左門之助と飛掛り何の苦もなく打留て
手疾く小兒を抱き上身内を見れと疵も無く氣絶致して居るに付准備の奇藥を取出し清水を返
で飲しむれば其藥効の著く忽ち蘇生爲したれ共何れの者やら相分らす居所姓名を問はんに
幼稚の物も辨へす只泣叫ふ耳なれば途方に呉て宮本は今更見樂る事も能はす抱上し儘イ

み居しが獨り歎々以爲斯く深山の谷間と雖も咳へて來る所を見れば必ず近き人家の有んか
めし此兒の親達は氣も半乱の如くにて嘸かし案じて居るなるべし憫然の事よと思へ共今更行
方の道さへ知ねば只茫然と行ひのみ此時數多
の人々が獵人体の物を先に立手に〳〵竹鎗を
提るも有り或は鋤鍬鎌抔を各自携へて駈來り
左門之助を見るよりも互ひに面を見合させ猶
豫体に見へけれは大音上て宮本は有りし順序
を物語り抱きし小兒を指示せは何れも安堵の
思ひを爲し側に來りし其中より一人先へ進ひ
出私し事は岩鼻村の農夫嘉右衛門と申す物夫
成者子息にて山鮫の爲めに噛ひ取れ所詮
死骸も得られすと覺悟と致せと迫ての事に山
鮫を退治て敵を討んと俄に村の多勢を依頼此
深山へ入來し處思ひも寄ちす子息には再生の
御慶を歎りしお禮は詞に盡されすと謝し涙を
押拭ひ左門之助より小兒を請取身内に紙も有
んかと改め見れば格別の怪我さへ無きは嘉右
衛門は歎はも驚しと飛立計り又此處へ集ひし
動く山鮫の動れし狀況に何れも感動為す耳か

又宮本の凡人ならぬを聞き大地に伏拝して神の知くに尊敬し此より岩鼻村に伴ひ嘉右衛門は云やも更なり所の農夫二同集り昔日々に深く謝し只管逗留を勸むれど僅か一日此處に留り全所を立出宮本は約一全の人々が案内に隨ひ再度中仙道に出ければ此にて見送りの者に別れ全國姨捨山は古來よりの名所なれば角も角一見爲さばやと又俣道を轉して急さしが山鈴と思治せし時受たる毒氣の殘りし者にや手足へ又も痿を生し歩行の自由に課せぬ者から旅泊に於て治療を加へ空く光陰を送りて竟に九月の中旬に至り漸く全快致せしよど姨捨山をも一覽し夫より尚も名所古跡の多けれは殘らず見物爲さんとせしが思ひ返して考ふれば我仇討の身を以て余事の名地を探ると云ふは我等ながらも過てりと自ら悔て路を横切村井塩原打過て擔尻驛に出けるが此より順序に驛路を累を奈良井數原の間より右へと切飛彈高山をさして赴きける

第十二回

豪商力士暗日根峠に賊難に逢ふ
左門之助强賊を討て衆人を助る

峨々たる峯や谷川も幾重か越て今此に長の光陰を打過し主從九人の旅の者四方の氣色を眺めつゝ名所古跡の事共を互ひに語り嘯き合打戯れて泊りをも急かぬ旅の人々は當時加州の内にても二と呼れし豪商人油屋忠兵衛と云ふ者なるに一人處女の花を連手代喜兵衛に若者出入の力士と三人と此外物持二人を從へ大和巡りの返り路はや本國にも遠からねば緩々國へ歸らんと氣儘に歩行來りしが飛彈と加賀との國界て至て嶮き山續に樹木の梢て繁茂して白晝さへ暗き木下闇當時闇日根峠と呼て往來の旅人も最稀なる別て毎日黄昏には山賊共の現れ出往來の者を奪ふよし其噂さへ高けれど遇は全くの事共思す油屋忠兵衛親子の者并に力士等諸共に山の麓へ差掛れば旅人と見るより旅籠屋の男女は夫へ走り出で是非にお宿を願ひ度殊には折々山賊の出る咄しも御座り升れば早くお泊り遊ばせと変るゝに勸むるより娘お花と忠兵衛も旅宿の勸めに從ひて已に泊りに就んとす此時力士三人の者片煩に笑を含みつゝ其場へ進みて云るやう未だ時刻も早くしてお泊り爲るよ及び申さず且又賊等の十人や二十人の出れば迎私し共の三人がお側に從ひ往るから故出賊共を打懲し旅人の害を除く可しと心遣ひは御無用と左も深く遇ける中にも三保松潤五郎は一層勇み進み出小賊共の出るにも未だ日も高き事なれば此なる峠をお越なされよ又微りにも私し共は天下の力士と呼る、者が賊の出ると聞よりも泊りし抔と後日に至り多くの力士に云れては何面目の御座る可き若し盜賊の出るに於ては日頃の力を現はして一人殘らず打殺し旅人の害を拂ふ可し必ず心配遊ばされず私し共の働くを片邊に於て御覽せられよ明か氣遣の爲給ふなと一個か云ば其余の二人も三保松に心を添へ是非〳〵峠をお越めされよ左すれば翌日の泊りも宜しと頻りに勸め立られて然らば斯く迄力士の衆が受合下さる事なれば少しも恐怖事も無し娘よ心配致なと氣を勵して忠兵衛は小休なせし茶代を與へ旅宿の主人男女の者が止るを聞ず打連立峠をさして上りける已に二里余も來りし折柄はや日も西に傾きて梢へを翌る小鳥さへ囀音も塔へて最淋し谷間に流る、水音は又流々として凄然見通し難き山道なれば心細くは思へ共今更後へは戻られず早く峠を越さん者をと急く折しも横合より現れ出たる十四五人何れも異形の打扮にて行方の路に立塞り路金を預らず衆類まで命が欲くば滅して仕まへ兎や角言は斬殺さんと藤柄卷の山刀皆一同振放ち押取圍ひと見るよりも三保松には玉手山岩戸川の三人が大日明て冷笑命知らずの山賊共余の旅人を事替り已れ等知らが出れば迎遇く樣なる者には非す望む處を覺悟をせよと云つゝ力士の三人

と手頃の棍を根拔と爲し群り立たる山賊を右と左りへ打振廻立蹴然たる王め荒たる如く無三無三に打倒す其勇力に怖り驚くや鳥獸も戰ひしが谷方左方に逃亡れり此働きを忠兵衛初め恐怖ながら眺めて居しが賊徒は半死半生よて往方知れすに成けれは何れも安堵の思ひを成し少しも早く此山を越さんと一同立上る折柄又もや數多の賊が再度此處へ押寄たるに前に力士に打立られ散乱おしたる者共の斯くと注進致せし者にて又此山を栖とおし賊の張本と仰がれたるは福島左衛門太夫政則の浪人大山太郎照國とて力量願る優れし耳か鎗術の奥儀を極めたる大膽不敵の曲者なるか今此處へ馳來り鎗取延て立向ひ能くも手下の者共を打懲したる其返報我手に懸つて往生せよと聞より力士三個は高の知れたる賊徒の張本唯一打と勢ひ込三保松を始めとして大山太郎の左右より打て掛るを者共せず宛然飛鳥の如くにて受つ流しつ遇ひしが一聲叫んで飛鳥樣に鎗の石突取直し突よと見へしが三保松て急所を突れ氣絶致して倒れける此を見るより二人の力士は眼前の敵逃しはせじと益力量を相顯し一心不乱に戰へ共大山太郎は賊ながら武術に優れし者なれば何かは以て堪る可き王手山久太郎岩戸川涙之助も花に急所を突れしより眼眩みて齒を喰しめ息の根留て倒れたり照國莞爾と打笑腕立致す此奴を一時氣絶を爲しめたれば最早妨け爲す者非す者共來れと云ながら徐々歩行近附に忠兵衛始め其余の人々杖柱とも頼みたる力士三人が倒れしに何れも生たる心地も無く齒の根も合す踞り同手を合して伏拜み震へ慄く計りあり此時大山太郎に於ては娘お花を見るよりも手下の者に差圖を爲し密く岩屋に連行べし我等が妻に致さんと泣居る娘を抱上させ拘引行ん休なるよ忠兵衛我身も打忘れ小賊共へ組り付所持の金錢衣類まで差上ますは厚はねど娘計りはお免あれ慈悲とや情とや翔み升るを取組る連則ばとて命知らずの山賊等が非命を歎して泣叫ふ娘を花を

搦き上情け用捨も荒鬼よ捕へられたる小鳥の如く岩屋をさして連行れり忠兵衛今は氣も狂ひ心も乱れし如くにて娘の後を追んと爲すを大山太郎は引留め諭めの無き此の老朽如何はと歎き吐くとて奚ぞ再度返さんや其より所持の金錢を殘らず此に出す可し命計りは助て遣らんと云つゝ忠兵衛を縛り上又も片邊に伏轉ふ手代喜兵衛に若者物持までも縛めて路金を入し行李は更なり兩懸其他の手荷物まで手下の者に擔がせながら已に其場を去んとせしに思ひ返して立留り此奴は並の賈人ならずと最前よりして見留しが此なる行李の印を見れば加州家の用達油屋忠兵衛と覺へたり此者を生して返さば必す加州へ訴へ出ん然る時には金澤より捕手の人數を向るは必定憫然ながらも斬殺し後日の患を除かんと又も徐々立戻り手下の賊等に申付曽打刎よと下知なせば鬼共見紛ふ荒男四五人夫へ走り寄り藤柄卷の山刀拔と見るより忠兵衛は身を慄はして泣叫ひ蹉跎なして打歎き此儘お放ち有る迚も決して他言は致さぬ故に命計りはお助あれと聲を震はし身を悶へ又涙れんとも縛めの繩に掛りて繋れたれば白刃の首に臨むをば待より外にあらさりける大山太郎と此を見て大口明て冷笑いつ吐きつ叫べば迚生置難き奴なれば悉佛申て往生せよ其代りにて娘をは此の照國が妾と爲し長く寵愛致して遊はす是を某迚の土産に聞て淨佛せよと罵りつゝ手下の者へ目配なすに其意を悟りて小賊共は新身の剛力振かさす身も白刃の下に居て最早忠兵衛の一命は夜明に殘れる燈火の風を待つより尙は危ふし却説宮本左門之助は飛彈の高山も何時う過き時日根嶺に行掛れば旅人と見るより旅籠屋の主人は其處へ馳出し旦那樣には此山を今からお越しあらんより今宵はお宿を願ひ度是非にと請はれて今更に急がぬ旅の事なれば左門之助は立留り然らは一夜のお世話に成らんと去つゝ此家の勝手に腰打掛た折柄に主人と又も側へと來り最前加州家の御用油達屋忠兵衛と申さ

る御人が都合九人のお連にてお休遊ばされし事なれば嶺へ賊の出る趣きを知らせ申上たれ共お連の内なる力士の衆が出賊抔の出れば迚少しも恐るゝ事も無し未だ日も高き事ゆゑに山を越さんと勧められ遂にお立なされしが定めし絶度今頃に多くの賊に取圍まれ難儀せられて御座るへし旦那様にはお泊りにて明日緩々お立でゐれば御氣遣ひは御座りませすと咄すも世辞の一つのなり賊くと聞より宮本之主人に向つて云るやう所は文容易あらさる事なり我聞されば現も角も聞たる上は棄置れす力士の身分を以てさへ賊の出ると聞よりも勇発て出立致すと云ふは實に見上た精神なり我等此より追付て萬一賊等に圍れ居らば助けて遣さんと立上り茶代を其處へ投與へ後をも見すに馳出し聞日根峠の絶頂自掛息をも繼す上りて來しに谷間に中りて泣叫ふ女の聲を聞か否扨こそ賊等の手に捕れ難儀致して居る者ならん猶豫はならじと宮本之聲を知るへに馳下れは小賊共はお花を攫さ岩屋の方へ行んと爲す其形勢を見るよりも走り掛つて打殺し手向ふ者を右左り手玉の如く投出せり不意よ打れて賊徒等は皆散々に逃亡たり左門之助は泣伏たる娘お花を抱起し最早恐るゝ事は無し連の者等は何れにあるや樣子は如何にと問ひ掛られ涙ながらに丟々と物語るをは聞よりも左門之助は娘を抱へ取て返した嶺の絶頂汝ぢ恐怖す須臾の間此處に潛みて待居よと生茂りたる熊笹の中にお花を置し置尚は一驟に駈來り遥向ふを見渡せば巴に油屋忠兵衛の後へ廻りし小賊が首を刎んと爲す体に馳付隙もあらされば手頃の石を取より疾く覘ひ外さぬ早速の眼慣し不意に撃れて眩き後へ撞と倒れける此間に遲さす飛来り矢庫よ一個を斬倒す其勢捷に恐れしや小賊共の逃ふ体に大山太郎は現れ出已れば何國の者か知らねど能も妨け致したり我手に掛つて死亡と錦取延て突掛るに心得たりと宮本は松の古木を棚に取り憎き賊者の眉間かな我こそ天になり替り汝ぢが首を打落さ

んと覺悟に及べと云ながら頭上を目掛て斬付る鋭き太刀を振潛り無て突出す鎗先を受つ流しつ剱術を盡し一上一下虚々實々互ひよ劣らぬ手練の早業刃を交る形勢は宛然電光石火の如く人交るせす戰ひしが大山太郎はます〳〵屈せす突立來る手練の精妙流石の宮本左門之助も次序に大刀先鋭るゝ耳か其鎗先を受兼て後へ〳〵と突立られ已に危ふくなりければ這は口惜や此奴の爲よて果敢なき最期を遂るかと思へば尚は更氣力も衰へあはや斯よと見へける折柄不思議や吶と吹起る風を避んと振向ふ後は平地の松山なるに此風竟と馳入ける遁しはせしと照國も續いて追掛來りしに仕濟したりと振返り勢ひ込て立向へば賊首も大喝一聲叫ひ七離七合戰ひしが鎗の石突木毎に支へ働き自由を得さるより扨は彼奴の謀計に釣込れたか遺憾と悔れと猶豫の有されは茲を先途と戰へ共勇氣挫て鎗先乱れ自ら後へ退くに得たりや應と宮本は付入付込斬立る其太刀先の鋭さに避んと爲して不圖も松の根方に足躓き倒るゝ處を透さす飛込左りの腕を斬落せり切れながらも強氣の賊魁起んと爲すを首打落し尚はも前後に眼を配れと最早逃亡たる者か殘賊一人も見へされは刀の血を押拭ひ鞘に藏めて宮本は忠兵衛初め其餘の者等か縛められたる繩を解片邊を見れは力士の三人仆れ伏て居るに驚き側へ立寄り改ひれと身内に疵の非すして全く氣絶と覺ゆるに恐るゝ抱き起し活を入しに蘇生唯茫然として詞なし此時又も宮本は匿し置たる娘をも伴ひ來りて引渡せば忠兵衛親子は夢かと計り余りの事の嬉しさに我を忘れて取縋り先立者は涙にて須臾詞も有さりける漸くありて忠兵衛始め大地へ頭も擦付て誰君樣かは存知ませねどお助け下され有難やと異口同音に述たる儘皆平伏て居たるのみ左門之助ゑ腰打屈め哇や何れも其樣に平伏せられて在る時は拙者に於ても當惑致す最早賊等の居らされは最前麓に於て其元達の事を聞き萬一賊徒に取圍

されば難儀はられて御座るならお救ひ申さん其爲めに急ぎて來りし甲斐ありて我等も滿足致せしんと詞靜かに述ければ忠兵衛漸く頭を擡げ宿所姓名を打明し私し諸共九人の者命を茲に棄べき處一人殘らずお助下されお禮は申盡されず此御厚恩は死後までも銘つて忘却致しはせずと又も頭を地につけて演る有より左りよりの拜みつ打悅みつ又道理と知られける此時忠兵衛も懷中より百兩包みを取出し此は甚だ失禮なれ共御覽の如く旅中の身の上差當てのお禮のみ再に御受納下されと恐る〳〵差出すに左門之助は打笑ひ其し禮物を得ん爲にお救ひ申せし者なちす小生迚も卿かの路費と所持なし罷り在る奚そ謝物を受べきや心遣は無用なり早黄昏に及ひしなれば疾々此處をお立なされよ若し又賊等の來りもせは由〳〵敷大事と相成へし我等も此儀發足せん御緣もあらば又其内對面致し申へく何れも去ばと立上るに忠兵衛初め其餘の者共に謝物を勸むれ共手にさへ觸ねば是非も無く唯平伏て拜すのみ中にも油屋忠兵衛は膝進ませて打向ひ迫ての事に御姓名を仰せ問られ下され度と只管請ふて止されば餘義無く姓名を相名乘別れを告て立去りける

第十三回

宮本武蔵罪を受て獄舍に繫る　奸吏私慾に眩して宮本を亡んと謀る

山高み中央を埋む群雲に路急かれる雲低暗日根嶺を去りて後左門之助は旅宿の夜despite然に大熱相發し其翌日に至れ共發足すへき氣力も無く竟に日數を累ねしが漸く本腹致せしに此家を出立なしたる頃は冬の初めの日和癖として雲もき脚と見る間に山風荒く時雨來て降み降ずみ旅の空色に寒氣を受しにや又も持病の再發して歩行の自由ならね共苦痛を忍て漸々と金澤城下へ繁近き小清水村迄來りし折柄一盞苦痛の激增て最早一歩も進まぬ耳が忽ち其處へ倒れ伏たる此時に通り懸りし老人は居酒渡世の庄兵衛とて慈悲善根を心に懸虫さへ殺さぬ性質なるに能云ふと無く佛庄兵衛と呼なされ人に知られし者なるが今ま不圖も宮本の倒れし体を見るよりも漸うにして脊負つゝ我家ま伴ひ返りし上へ老の夫婦は一心に醫師と藥と駈廻り介抱我す誠心の厚し者か宮本は其翌日に及ひてより漸く心氣我に返り始めて此家に伴なされ介抱受けたる事をば悟り只管夫婦の厚意を謝して此處に日を累ねる事余日にし及ひ漸く起居の自由なるに至れ共未た氣力の衰ろへて歩行をも心のならねば庄兵衛夫婦はまず〳〵忠實に能く仕へ晝夜を別たす看病し尙は此上ま援々とお心遣ひは遊ばさず御養生の然るへし又た何なりとも御用の儀と御遠慮の無く仰せよと替る〳〵に慰る夫婦の心に絆されて又も日數を重ねし内遂に霜月の初旬となり本腹せしにあらねとも大ひま氣力も整ひたれは日毎は最寄を徘徊し若しや敵の手掛りを聞き出すべき便宜もがなと心を附て見廻る内或る日宮本は朝早く豫て庄兵衛より聞得たる近き名所を探らんと其處此處と無く散歩して竟には歸路を取り違ひ夜半に及んて漸々と庄兵衛方へ歸りて來しが何やら家は群集して物騒然き体なるに不審なからも宮本と勝手の方より入らんと爲すに待ち設けたる捕吏の多人數御用の聲と諸共に有無を言せす縛しめたり其翌朝に相成と奉行原田軍次兵衛は法廷に出席致す間も無く左門之助を呼出し眼下に睨て糺問やう其方と何國の者にして又た姓名を何と申や遂一白狀致すべし已に昨夜小清水村にて居酒渡世庄兵衛夫妻を殺害し金子二十兩衣類六品を奪ひ取りしは其方ならん汝ちは是まで庄兵衛方に先頃中より逗留なして在し由其大恩を受けながら斯る大罪を働くば人面獸心と謂つべし其大罰は眼前斯く召捕れたる上からは如何はど偽はり陳する共遂かに免れおうせんや疾々白狀致すべし如何ま と計り糺問せられ左門之助は頭をさげ出所

雑者を申遣私し事は例せの如く座兵衛夫婦の者を受糾く全快致せし者にて已に拙立すべかゝりしを達て夫婦の留るに隠ひ伺は遅延は致せし種の日〻諸所を徘徊し昨日と夜半又及び歸宿致せし其折柄存知も寄ら兇罪をうぬけ召捕には相成たれ共其場に於て私しは身に聊かも覺への無き故申披きを致さんにも御捕吏の諸君には有無をも問はず縛められ御拘引になりたるが私しの所業ならざる証據に所持の大小を御改め下さるべし且又庄兵衛夫婦の者を殺害致せし者なれば爭か安閑として立戻るへき此段を鎬と御賢察下されなば拙者の所業にあらざるは直ちに分明仕ると詞爽かゝ陳けるを軍次兵衛は聞咎め汝ぢ斯く迂飼を工み犯せし罪を遁れん逆何ぞ此儘免さんや如何ゝも其方が大小にて怪き跡は見へね共庄兵衛夫婦の受たる鉈は出刃包丁の類を以て突殺したる者なる由左すれは刀脇差とも怪き事は無き筈なり又殺害致せし者が立戻るべき謂れ無きと雖も其方持所の手荷物を殘し置たる事もあに其夜の内に立戻り持去んと致せしなるべし然る時には其方が飽まを陳し偽る共申披きて相立難しと此日は入牢なきしめたり扨又原田は宮本を賊と見認て召捕せ帶たる両刀を取上て中身は勿論拵へ迄篤と改め調るに曾尋常の者ならねば獨り心に思ふやう渠は如何なる身分の者にて斯く各作の両刀を本常帶し在る者にや如何にも爲して我手に入なば子々孫々の寶あるべし然り〳〵と點頭つゝ工夫を旋し有けるを折しも鈴木源吾兵衛の入來り少しく願ひの事ありて お上致せし趣きを申入しに軍次兵衛と直樣奥の一室に通し鈴木氏には夜に入て如何なる御用の有りしにや具に仰せ聞られよ拙者の愚意は余人と替り別段指南を受るもへ何かお禮も致さんと心に存する折なれば決して御遠慮に及ばね間願ひと云ふは何事なるか家族の者も居らされば併に氣遣ひ爲なんと心得り無な詞を聞き源吾兵衛は小膝を進め斯くお事行のお詞に小生大ひに有難き

更何をか裏匿さん實は先年私しが石州津和野に在る砌り宮本勘解由と申するものと武道の事より爭論し竟に討果して立退しに其奴の倅左門之助と云るもの我等を欲と附覗ひ諸國を廻る趣きは疾に承知を致せしが先に不圖途中に於て堀を見留め申せしなれ共僥倖彼奴の拙者を見留す併し御當家に在るを知り尋ね來りし者ならんとそれより易き心も無く去り迚聊か宮本を恐る、譯にて御座らねど訴へ出る事も有りなば大ひに名義を失なはんと存それのみを心痛し今日までも罷り在りしに今回貴君の御吟味あるて佛庄兵衛を殺害し金銀衣類を奪ひし賊にて宮本左門之助と申すよし承知致して取敢ずお願ひ申に出たるなり何卒貴君のお見込にて拙者の安意致すやう御計ひを願ひ度此儀を聞濟給てるうへて拙者が武術の奥儀をも御賢息へ御傳授申御家中諸君の多しと雖も誰も及ばぬ御手練に必ず御教授申し上御恩報じを致さんと始終の事を打明し願みを受て軍治兵衛は莞爾と計り打笑ひ如何にも其儀は承知致せり貴殿の御安意なるやうに急度計ひ申すべく其の替りには只今の御誓言に違ひ給ふなと互ひに固く誓を爲し尚は彼に角と兩人て數刻の間密議を遂夜陰に及んで別れをし能迚知る者あらざりける其翌日と相成ければ原田は法廷へ出席し左門之助を呼び出し如何に宮本庄兵衛夫婦を殺害し金銀衣類を奪ひしなるべし今日白狀致さずば手強き拷問に及ふべし心を定めて申立よと尖どき糾問を受たれ共身に寸毫も覺へぬ事もろ奉行原田に打向ひ已に昨日も申し上たる如くにて大恩人なる庄兵衛を爭か殺害致すへき殺さぬ証據は留守中に斯る變事の有りとも知らず戻りて來る處を以て拙者の身に取り覺への無きを御賢察の程願はしくと陳るを聞より原田は怒り已れ大膽にも奉行に向ひ不埒の言上に及ふ者かな汝ぢの所爲で有る無きを吟味致すか職務なり如何はと鋭り陳する共歎かるゝ某しならず全く其方が殺害せしは疾より見貫罷り在る白狀せすば冒して見せん者共進備に及べよと飼き下知を受るより左右に扣へし同心共が發と答へて宮本を木馬の上に跨がらせ両足へは大ひなる二つの石を結付て前後へ數十度引廻すに何かは以て堪る可き臀は破れて血は流れ左右の足は拔るが如く然共聊か聲をも發せず苦痛を堪へて言はねば原田はますゝ烈火の如く眼を見張て憤はり彼奴手弱き拷問にては容易白狀致すまじ今度は石を抱せよと下知の詞も畢らぬに情用捨のあらばこそ又も多人數立掛り木馬の上より引下し替るゝに宮本の膝に數多の石を積前後に於て搖動かせば如何ぞ以て堪るべき下は小砂利を敷詰たる上に座したる事なれば膚は微塵に崩る、計り血は滾々として流れ出れど此又苦痛を忍ひて一言も發せず竟にはうんと仰反て氣絶致せば氣付を與へ蘇生致せば白狀せよと呵責に逢ども宮本は身に覺への無き事もろ假令此儘責殺されても抑て盗賊の汚名を受べき如何はと拷問に掛る共冤罪の爲に刑せられんや殺さば殺せ責らば責れと心に堅ひて言ずず原田は日々用捨あく七日の間拷問致せしに早宮本の一命は今にも消る計りなり此体を見て軍次兵衛は心の中に思ふやう今一度釣上しなば必ず艶命致すべし然る時は鈴木より軈の事も成就なし我取上し両刀も人知れずして手に入るこそ之両端の計策なりと竊に獨り打悦ひ又翌日とあるが否左門之助を呼出し一層手荒な拷問せよと夫々用意をおさしめたり此時まで與力の田頃田坂彌十郎も陪席し日々の吟味を詠先て居しが奉行原田が調べ方手荒の事を專らにし不審の事共多くして已に一言を發せんと思ひ詰ては居れ共何を云ふにも上役なる奉行の權威に已ひを得す差扣へて在りけるが最早今日宮本を釣しの拷問に掛る時は必す絶命致すへし棄置れすと心を決し原田に向ひて云るやう某がし不肖の身なれ共愚存を言上仕らん憚り多き事なから熟々宮本の人品及ひ冒頭の樣子を伺ふ處中々人を害殺し賊を働く者共思へす萬一外よ

り賊の罪なれば此お奉行の越度にして且又日々お手荒き拷問のみをせらるゝ故身躰斯く迄痩衰へ最早餘命の有り共存せず然るに又々拷問なさらば必ず命を失ひ申さん渠白狀を致せし後絶命なすは宜けれ共未だ服罪せざる内萬一の事有りし上梁が齋藤津和野より事實を糺して御當藩へ掛合れたる其時は容易ならざる事なるべし拷問のため殺しなば此お奉行のお恥辱ならずや能々御賢慮有り度と申陳るを聞よりも原田は大ひに怒色を現はし我等は假にも奉行あり善惡邪正を糺すを以て我職務と致するからは見認る處ある故よ嚴重糺問なす者なり然るを何ぞや其元には罪人宮本を寃罪と見做し外に賊の有んとは以ての外なる所存なり且又齋藤津和野より彼是申越とても恐るゝ事の何かあらんや其上ならず某しの職務に就て越度のあらば割腹致す我心底吟味淸に及ふ迄決して口外爲給ふなと氣色を變して無法の云分彌十郎も呆れ果心中大ひに怒りしなれど討論するも無益の事と其後は默してある程に原田は又も指揮を爲し疾く拷問に及べよと申渡せば酷吏等が最早生たる体も無き左門之助を縛り上左右の足にて重石を結付車仕掛て引上たるが前後へ屢搖動かせば骨は折肉も破るゝ計りなり然共一言半句も發せず唸りなして息たへたり夫と云ふより引下し氣付を與へて介抱すれ共稍半時も心付ず氣絶の儘よて有りければ仕濟したりと軍次兵衛は心の中に悦びける彌十郎は期と見て自ら其場へ馳出し醫師を招て諸ともに介抱すれば宮本の命數未だ盡ざる者にや稍く有て眼を見開き又其儘に瞑を閉て寂然死人の如くなり此体を見て彌十郎又も原田に打向ひ最早御覽せられし如く此後手荒き拷問にては助るべく共存じ申さず唯此上の願ひよは明日限私しへ御吟味仰せ付られなば必ず白狀いたさせ申さん平に閑濟給はるべしと思ひ込だる体なるよ奉行原田と打笑ひ某し日數を費して强問なせ共白狀せぬを貴殿が一日糺さば迚爭か罪に服す可き望みとあらば

罪す角も吟味いたして見らるべし明日罪に服さぬ時は責を責劇て鉛の熱湯を流し込假令絶命いたす共苦しからねば其元にも篤と心得置れよと最厳かに云渡し此日は退席いたしける

第十四回

義壯士獄舍に忍て宮本を論す　菅神の顯現宮本の嫌疑を解しむ

亦閑く宮本左門之助は獄舍の柱に打凭れ最早生たる心地も無く假令此儘死する共怨か賊名を霽さんや翌日は鉛の熱湯を脊を裁劇て流すとかや日毎に苦痛を爲んより寧の事に死するが增しと已に覺悟をいたせし者の敢も討得ぬ其前に無失のに爲て死るとは我はど薄命の者もあるまじ思へば尙も無念さに嚙をすれど今更に又遇るべき術も無く是皆前世の因念と獨り心に覺悟して死する此身は厭はねど未だ鈴木の安否も知らず果敢なき最期をなしなば草葉の蔭にて父上や其伯父君の歎かせ給へん之を思へば死もならず如何せばやと當代よ一二と呼る、豪傑も好吏の爲に捕へられ悲嘆に咽ふぞ憐れなり偖て又田坂彌十郎は其身與力の出頭なれ共奉行原田軍次兵衛とは雲泥黑白の相違にして智勇も優れし武士なるか左門之助の無罪をさとり如何にもなして救ん者と心よ思ふ處より原田に請ふて明日は自ら吟味に及ふなれ共一旦罪に服させずば助る道も無き者と種々よ心を碎きしが夜半に至りて潛かに獄舍の口よ來て見れば半番の者三人共はや消殘る火鉢を圍み震ひ凍へて居る程に彌十郎は進み寄り牢番の衆御苦勞と壁掛られて心附忽ち形を改め其儀に及ばずと押止先嘲かし寒氣の堪へ難かるべし我等の夜中見廻るも是又職務の事なれは各々方をもお察し申す此は甚だ些少なれ共三人の衆に進すれば寒さを凌ひで參られよ拙者は篤と宮本の疲れし体を見廻たれば後へ抉して氣遣ふなと深き情の詞に悅ひ牢番三人は平常より副染の酒肴を嚥入て貪ひし金にて飽迄でも酒宴をなして居

たりげる却説田坂彌十郎は牢番の者を説避て心易しと唯一人獄舎の内に入が否哉や宮本左門之助殿心を惱に持候へ宮本氏と聲掛られ眠り居しには有ね共氣力の疲れて横はり前後も知らず有りたるよ誰やら我名を呼ふと思へは稍にして起直り田坂の面を見るよりも貴君は如何なる御用にや深夜を厭はせ給はぬ耳か此獄内へ御入來ありしや死を決したる小生なれば少しも早我首を刎て苦痛を逃やうねがひ上るとて云ふさへも秋の霜夜に雷を立し虫の聲より憐なる彌十郎は腰打屈め某し夜陰に來りしは貴殿の命を救ん爲罪り越たる者なれは決して疑ひ給ふ可からす全く無罪と存知たなれ共奉行ならねば是非も無く差扣て居りたるなれと明日罪ふ服されすは鉛の熱湯を脊に流され必す絶命せらるへし一時賊名を受る共明日法庭に出られなは殺害致せし趣きに屹度服罪なさるべし然る時には當家の法にて再度獄舎に移し替三十日を過されば所刑を爲ぬ掟なり此間に拙者が心を碎き實の盜賊を搦捕貴殿の寃罪を救ひ申さん奉行原田は如何なる事にや拙者の諫を聞入ず日々手荒き拷問に及び殺命せらるを待つ体にて太だ不審の事共多く今更彼是討論なすも採用ゆべき者なちず夫故窃に忍ひ來て我精心を打明し助命の手備を能く示し善惡邪正を飽迄糺す我等の精心なれば一旦罪に服する共一時の事も為宮本氏必す翌日は服罪せられよ左も無き時は時日限り貴殿命の果敢無るべし我神佛に誓ひを込助命を謀る精心なり疑惑せられす某しの詞を信じ給へよと再三再四繰返し得會せしめて彌十郎は尚も彼に角示す折しも最前酒店に到りたる半番三個の返りて來しに別れを告て立去ける後にて宮本左門之助は夢かと計り打悅ひ斯まで左門之助を謀り給ふは嬉しけれ共身に聊かも覺へ無くして殺害致す耳ならず金銀衣類を奪ひし賊と諸人の口に掛るも口惜又三十日の獄内に寃の賊の出さる時は無論我身の所業となり後世賊名を殘すは必定夫より拷問の爲死を

慕て苦痛を早く免れんと思ひ返して宮本は又候死せんと覺悟をなせり然るに時刻も順序移り丑滿すぐる頃なりけん何國共なく梅花の香り鼻を貫く如くにて不思議と思ふ間もせず吐と眠來る風諸共に忽然として現れしは此菅神の顯なるか衣冠正き姿にて左門之助に向はせ給ひ如何に宮本其方は嚮に靈夢を受ながら其を破りし事に依り今回の大難に陷りたるなり未だ汝ちは知らす有りしや已に一命を失ふべきは山鮫の爲に毒氣を受其場に於て喰えれべきに力を添て討したり亦其次と暗日根峠に賊首大山照國の鎗先に懸りて死すべきを後の松山に引入させ是亦首尾能討せしなり今當國に踏入て此大難を受ると云ふも自業自得の事ながら余りの憐然と存ずる故今回の難をも救ひ遣す就ては先刻其方に堅く誓ひて立去し彌十郎の詞を信じ明日こそは寃罪に陷よ自然と汝ちの一命は助る事に至るべし我云ふ處に違はずば必す命を失はん夢々疑ふ事勿れと宣ふ聲も爽かに屢說諭せられしと思へば夢の覺にける余りの不思議と宮本は只茫然と柱に凭れ亦熟々と考ふるに今のは全く夢なるか最前態々來られしは慥に田坂彌十郎我一命を救ん爲御入來ありし趣きなるか彼是思ひ合すれば最も奇怪の夢なれ共五臟に勞れを生せしより斯る夢をば見しならんと心に留す有りけるが尚又 倩 再考するに夢中ながら馥都たる梅花の香りを覺へし耳か岩淵谷にて山鮫を退治なしたる其時と暗日根峠に賊の張本大山太郎を敵手に取已に危ふき折柄も救ひし事と夢ながら告させ給ふと覺ゆれば左門之助は今更に疑ふ心も此に晴噫有難や勿体なや某し江都に在る砌り三度大難を受るといふ正數靈夢を蒙りながら破りし其罰を受もせす又も我身を憐み給ひ救えせ給ふ者なるかと落涙袖を浸すか如く夫より猶も宮本は天滿宮を伏拜み待つ間も非す何時かに其夜も明し事なれば奉行原田は早朝より彌十郎を出牧て其身一人出獄し命日立そは是非共に拷問の爲絶命させんと腹に

江みし事なれば左門之助を呼出し唯一言の吟味もせず鉛の熱湯を流さんと夫〻用意を爲しゆたり斯共知らず彌十郎は出席致せば宮本を已に拷問に掛んとする其形勢を見るよりも原田の側へ進み寄り某も昨日願ひし如く今日の處は小生に御吟味仰せ付らるべしと云樂た儘宮本の間近く進みて打向ひ其方此まで白狀致さず覺へ無きと申立てるも佛庄兵衛夫婦の者を殺害せしゑ相違あるまじ何ほど僞り陳する共所詮逃れぬ汝ぢの罪科疾く白狀に及ふべしと云聞されて宮本は頭を擡て面を見るゑ彌十郎にて有りければ思ゑす涙を浮べつゝ如何にも私し是迄は覺へ無き旨申上しが據なる上は是非も御座無く遂一白狀致すべし全く庄兵衛夫婦を殺し金錢衣類を奪ひ取逃亡たれ共手荷物を忘れし儘に立歸り持去んと致せし處を御召捕と相成て今更ら忍れ入り奉る唯此上は一日も疾く如何なる嚴刑にも處せられ度と竟に服罪なしたれば原田の悅こび大方ならす且又彌十郎が調ふる間もなく忽ち罪ゑ服せしを又怪しみはなじれど白狀致せし事なれば直ちに口書掛印を濟せ直樣溜りの囚獄へ移さんとはせしなれど獄舍に差支の有りたれば其儘措き竟に年を越し承應三年正月八日と相成ける却說當時名も高き三保松清五郎は弟子二人を供に連春[illegible]撲場へ急ぐ向ふの横町の往來も留る群集の人に何事ならんと立留り樣子を聞ば去年の[illegible]清水村の庄兵衛を殺した賊が罪に陷[illegible]小路の牢屋敷へ今送られて來るなりと事の次第を聞よりも三保松ゑ弟子等に向ひ今日が初日の出先に於て忌しき事を聞く者かなはたくしは宜けれどお主等にゑ出世前の體ゆゑ囚人抔は見るなよと云聞ながら横町へ路を轉して急しに不思議や雪駄の前緒が切しに縁起の惡ひと吻きおから持なせし木履と穿替て進ぬ心を自ら勵しはや大通りへ出んと爲す曲り角にて不圖も最前避たる囚人に又

もや確と行合て最早避べき暇も有ねば是非なく其所に立留れり此時數多の人々が前後を圍みて來りしに見るとゑなしに清五郎は籠の上に乘られた彼の罪人の面を詠て身震なして行過けるが思ひ返して立留り熟々考へ見る處姿形は替れ共昨年暗日根峠に於て一命をさへ助られたる宮本樣に面体の能も似られた人なるかと思ひし見れば何と無く胸騒さして止まざる耳か今朝結立の髮なるに上元結の切たれば愈々以て打驚き扨こそ今のは疑ひ無き宮本樣にて有る故ゑ一度ならず二度迄も不思議を見せて神々の知らせ給ひる者なるか何にも致せ姓名を聞糺さんと跡ふ折しも通り掛りし牢番体の人を見るより懇切に其名を聞ば豈圖らん左門之助に相違なく其事柄を聞が否三保松は仰天し宮本樣に限りては人を助けは爲る共僅の金に眼の眩み居酒渡世の者位を殺すやうなる御人に非す是に就ては必すしも深き仔細のある事にて無失に陷ゐり給ひしなるべし猶豫とならじと引き返し玉手山の家にゑ來たり案内もせず馳せ入れば[illegible]のとき[illegible]石川も來合して二

大諸侶打ち寄せられより場所へ行かんとする身支度かして居たりしが兄弟子三保松が等閑ならぬ見幕にて飛込來しに打ち驚き頭を見れば乱髪もあ喧嘩にても爲れしかと左右より問けるに清五郎は頭を打撲み主等二人に問ふ事あり一旦命を救はれたる大恩人の萬一にも無失の爲に一命を棄給はんと知るが故は其時二人は如何致すや返答次第に火急の大事申聞する事あると思ひも寄らぬ一言に玉手山には岩戸川二人諸共進み寄り如何なる事か知らず共命を助けし恩人が無罪の爲め一命も危ふき事と知る上は我身を棄てる報恩は報る心の非すんば抔か人間と言れんや又何故に問はるゝも怪む体を見るよりも偖に夫なる心底なら一大事をば咄さんと左門之助が事柄を詞急驟物語り且又途中の事共を洩なく二人に打明せば聞度毎に仰天し我々斯て無事なるも宮本様のお蔭なり其恩報しは今日中に力を合せて獄舎を破りお救ひ申出んか一人は追手を防ぐ可し二人共生の有る限り替る〳〵脅す負て石州津和野迄遁れんか如何せばやと力士の三人最早一生懸命にて助る工夫を相談せしが一旦牢を破れは迚お上の人數に取圍まれ事叶はざる其時は只犬死を爲すのみなれば外に手術の無き者かと心を碎いて居たりける

第十五回

力士豪商と謀んで宮本の無罪を訴ふ

名奥訴へ容て名士を救んと決す

偖諸に曰く情と人の爲ならずと又宜なる哉斯て力士の三人と破獄おしても救んと種々に心を碎きしが中にも三保松は二人に向ひ油屋の旦那を初めとして助けられたる者なれば之より三人打連立忠兵衛様に相談せば宜き神工夫の有るかも知れず玉手山よは岩戸川お主等如何思ふやと問はれて二人は横手を拍少しも疑はゝと云はれ否力士の者は亀出し油屋方の勝手より案内をせず奥へと入ぬ此日忠兵衛は番頭の喜兵衛を敵手に茶の間に於て圍碁の勝負を娯み居しが斯と見るより碁の手を留め今日は偖も初日と聞しが今頃揃つて來られしは如何なる用の出來せしや遠慮に及ばぬ用向を咄し聞して下されと日頃愛顧の力士の事もあ心隔てず問ひけれと三保松は進み出差當りての一大事御相談を願ばん爲打揃つて参上せり旦那様にもお忘れあるまじ先年暗日根峠に於て貴君様と我九人の者が山賊の爲に殺さるへきをお助け有りし宮本様と咄しも半ふに至らぬを忠兵衛之を押止め其お咄しは爲給ふな今に聞さへ恐怖と身慄ひ爲しで又云ふやう斯して春を向へしも宮本様の御陰もあ毎朝私は御武運を神に祈りて居る程なれは片時なり共忘れはせすと咄すを聽より力士の三人一口同音に詞を揃へ左門之助が身の上を詳細忠兵衛に物語れば夢かと計りに仰天し驚く胸を漸く鎮め能も相談下されたり宮本様に限りては人殺し抔致されて賊を働く御方ならす至く無事に相違なし御恩報しは此時なれば金にてお救ひ申せるなら我身代を潰しても是非ともお助け申さねば私は固り力士の衆も身の一分か立ぬ者なり幸ひ南の町御奉行彦尾様とも御入懇なれは逐一言上致せし上再吟味をお願ひ申さん少しも遲々する處ふ非すと身支度迚も手疾くなし三人の力士も同道し打立連て四人の者は彦尾の邸宅へ到りしが中の口より案内を請へは用人福田新七と何心なく立出來り斯と見るより諸所へ通し夫より忠兵衛並ふ力士が何か至急の願ひにて参上せりと云上しに吉左衛門は之を聞如何なる願ひの趣きあるや兎も角此へ通すへし對面せんと許しの詞に新七再度諸所へ來り待設けたる忠兵衛等に主人の詞を申告奥へ通すに頓ての事彦尾は出て面會し何やら火急の頃しの由力士の者等も同道にては奥行抔の事なるか疾く申せよと尋ねを受忠兵衛聊か進み出今日力士を召連て願出ひしは余の義に御座なく豫てお聞に入もせし私し共が去年の事大和

巡りの返り路暗日根峠の絶頂にて一命をさへ賊徒の爲に已に失ふ處を拾石州津和野の浪士なる宮本左門之助と云ふ方よ九人の者迄助けられ其大恩は片時も忘れず罷在たるか今度不圖承るに佛庄兵衛夫婦を殺し金錢衣服を奪ひし賊とて今日溜りのお牢屋へ送られたるとの事なれ共是は全く無失の罪と思ひ込たる願ひには何卒宮本様の助るやう御再吟味を願ひ度此儀を聞濟給はる上は忠兵衛の身代御取潰になる迄も毛頭恨み奉らずと陳る側より清五郎も途中にて不思議を覺へ且又出所姓名を聽糺したる事迄も具に言上致すれは吉左衛門は笑冷如何なる事と存知の外容易ならざる願ひなり如何にも昨年其方等が救助られたる事柄は聞及びこそ致したなれと忠兵衛能々考へ見よ凡そ心と云ふ者は日毎に心の變る者にて初め善人と呼れし人も後惡人となるも有り初め惡人で有り迚も悔悟に及んで善人と忽ち變る者もあり今其方等を助たる左門之助と云ふ人も汝ぢら九人の者等が賊手に陷し其時は義勇を以て救ひし者なり庄兵衛夫婦を殺せし時は此惡心に變せしならん左すれば如何程其方等には大恩人て有る迚も今之人殺しの盜賊あらずや拙者は長らく病氣の爲に出勤もせず居たなれば曾て様子も知らざれど今日送りになりしとあれば白狀なして服罪し最早吟味も相濟て爪印口書の後ならねば溜りの獄舍へ下してせぬなり夫を何ぞや無失と見做し再吟味など願ひ出ると上を恐れぬ心得方余の者なれば直樣に咎を申付べきなれ共其方等の事もあるに聞捨にして取する間疾退けと滿面に憤りを含て云放され叭と平伏なしたるが恐る〳〵忠兵衛は再度漸く頭を擡げ仰渡さるゝお詞へ押返しては恐れ多けれと今一通お聽下され善人なり共惡人と變り惡心にても悔悟の後又善心となる者ありとか其論しは去る事ながら宮本氏に限りては變心なさる御方ならす其なる証據其砌り當座のお禮と百兩を差出せ共手にも取れす其後路用の乏く在さは私方へお出の等

なり居所も詳細申上慥に御存知なるへきに私し共へはお出もなく僅か計りの金子の爲に老の夫婦を殺す抔とは決して御座なき事なれば之等の事を幾重にも御賢察を成下され吟味直しを願ひ升ると陳る詞も口籠りて浮ぶ涙を押拭ひ申出るを聞よりも吉左工門は大ひよ怒り假令如何はど其方共の罪人宮本を信ずる共人を殺せし覺へのあれば奉行原田の吟味を受罪に服せし者ならずや犯せし罪科のあらずんば拷問の爲に死する共服罪すべき謂れなし左すれば何ぞ無失と爲さんよしや無失と看做とも一旦奉行たるへき者が吟味なしたる事件を再度拙者の調ぶる上は夫なる罪人は棄置て原田の非をば擧ねばならず又其上に宮本が犯せし罪科のある時は原田へ對して相濟ず其言譯には某しの切腹せねば相成ず斯る事をも辨へず再度詞を返すと云ふは甚た不埒の心底なり平常の入魂に甘んじて我を侮る願ひと見へたり疾く立去すば用捨をせすと息卷猛く罵懲され忠兵衛を始め力士の者は返す詞もなきのみか最早助る手段もなく頭を垂て蹲り默然として在りければ吉左衛門はます〳〵怒り退ぞかすやと荒らかに申渡され四人の者悄然其場を立んと爲を此時後の襖を開き走り出しは細君と娘菊枝の二人にて右左より取縋るを吉左衛門は磴と眼み婦女如きが此席へ罷り出へき所に非ず退き居よと戒れど聊か憶せす側に寄り御腹立は去る事なから妾の申し上るをば先一通りお聞下され最前よりしと忠兵衛が願ひの趣聞くに付申し上ねばならざる事あり尊君はお忘れあられしか前一昨年の事にして江戸お邸にお勸め中正月中旬の事なるが妾は娘と諸共に福田新七を供よ連龜戸村なる天神へ參詣致せし其歸るさ中食のため立寄し其家に於て不圖も若主が入來り如に酌を取せんと手込にすへき其折柄數多の者を懲た上お救ひ有し其方は宮本左門之助と申聞られ諸國を廻身なるが故に宿所と云は定すと緩々お禮の詞も聞れずお別申せし事共を返りし後に妾かお

細申上たる時居所さへ分らば尋て行厚く謝禮を爲すべき者を此後對面致しもせは是非恩返しを爲ねばならずと屢仰せられしにや娘よ和女も忘はせざじと母の詞に引續き又其時の事共を洩なく父よ物語れば妻は良夫の傳に言り今忠兵衛等が願ひ出しも其宮本氏に相違なし妾や娘耳ならず薪七迚其時は供に召連ありたれば能くお顏さへ存知おるべし旦那樣には此事を最早お忘遊せしか其頃仰せしお詞の今に違はす存するなら何卒御吟味下れよ妾や娘も願ひ升ると遇し事共物語られ吉左衛門は打驚き如何にも先年江戸表に在勤なして在る砌り妻や娘も大難を救ひ呉たる武士と宮本左門之助と聞及びしか又忠兵衛共九人の者を殘らす助けし御人とあれば誠に珍敷名士なり左すれば今回の一條も寃罪の事かも圖り難し某し出勤致して居れば假令係りて非ず共又宜き工夫も有りつる者を知らずに過し事とはいへ妻や娘の恩人を此儘見棄て居らるべき此より出仕の屆を出し罪の有無を取糺さん忠兵衛幷に力士の者願ひの趣き聞屆りと吉左衛門の詞を聞四人等く飛立計り嬉し涙に咽びける此時田坂彌十郎は至急に拜顏致し度事柄ありて參上せりと新七を以て申入れは吉左衛門と居室へと通し何やら急用の趣きなるが貴所も御承知ある如く長らく病氣の身を以て引籠りては居なれと容易ならさる出願に今日之より出勤なす實は拙者の所存なりしが就ては貴殿に早速ながらお尋ね申す事こそ有り此程罪科の極りし庄兵衛夫婦を殺せし賊の樣子は定先し御承知なるべし吉左衛門が身に取ても棄置難き一條ありて此儀をお尋ね申すなりと聞より彌十郎も進みより某し迚も余の儀又非ず石州浪士の宮本なる者人を殺せし賊なりと原田氏には召捕れ吟味せらるゝ樣子と云ふに日々手荒き拷問のみにて如何にも不審の事共多く小生再度嚴敷も爲つれど曾て聞入給とぬ耳か吟味に付て越度の有は切腹致す迄の事必す口外無用なりと奉行たるべき方にも似合ぬ餘りの事と存ず共下役の身分已むを得す亦宮本とヤする浪士は天晴優れし人物にて拙者の眼で見る時は中々賊なと働くべき決して者共思はぬより實と獄内へ忍び行云々斯々謀ひて一時の命を救はん爲假に服罪致させ置しが唯此上は全くの賊を召捕得さるに於ては惜き名士を失ふ故貴君に此儀を打明し宜しきお指揮にも與からんと參上せし事なりと田坂が始終の物語りに吉左衛門は雀躍し其元なくば宮本の命と疾くに失ふ可き能も斯まで計らはれたり我等に於ても棄置難き其事柄と申すのと何樣〳〵云々と江戸在勤の其砌り妻や娘の救はれたる事且亦昨年忠兵衛等が助けられたる始末をば逐一此に物語れば彌十郎は聽每に只々感歎する耳なり此時彦尾吉左衛門は何やら田坂に囁き示し忠兵衛等を引取せ夫より直樣出勤し左門之助が事柄を詳細書面に相認め再吟味をば願ひ出しに加賀家の國老長甲斐には願書を讀て驚かれ直ちよ彦尾を招き寄られ尙はも一伍一什を糺し且は見込至による迄具に承知せられしよりねがひの趣き聞屆再吟味をば許されたり

第十六回

彦尾の深智黑白邪正を裁斷す
宮本時運を得て不圖復讐に及ぶ

亦說く彦尾吉左衛門は原田軍次兵衛に書を送り庄兵衛夫婦を殺したる左門之助が身分に付外に調ふる事の有るより最早御吟味濟なれ共再度拙者の拷問なれば此段お含置れ度と念の爲なる書狀を見て原田は何やら合點の行す彦尾は是迚病ひの爲に出勤もせす在たる者が俄然に出仕を爲す耳か亦宮本の事に付吟味に及ぶ趣ひきなるが如何なる事を糺すにや心憎しと思へ共留る權威も無き儘又知らす顏して打捨置り此方は彦尾吉左工門彌十郎より密かに申越せる事も有るにぞ不淨藏に自ら到り取上置し宮本の刀は勿論脇差をも改めばやと立入て夫々調べ見

る迚も左門之助が両刀は買て見へざる處より彌十郎をも呼寄せて俱に詮議を爲したれ共丈藏の戸前に替りも無く誰迚外よ取扱ふべき者も有ねば外より賊の入しと覺へす察する所有なる品は尋常ならぬ名作なるか但し拵への金銀なるに必す私慾を起せし者が前に盗みし者ならんと是等の事を田坂に托し吉左衛門は工夫を旋し何れにも庄衛門を殺せし者の出されば左門之助が一命を助る事の能ぞぬ耳か我一分も相立す兎も角過しながら殺害されし其際の樣子を逐一糺しなば有き手掛りを得るやも知れすと小清水村の名主は勿論庄兵衛方の最寄に住す甲乙をも呼出し留打揃つて出たる折柄吉左工門は庵に若名主庄兵衛に打向ひ昨年十一月の初つ方居酒渡世の庄兵衛夫婦が盗賊のため殺害されしが其場の樣子を存知おるべし如何なる者の所業なるにや心當りも有る事なら裏み匿せすや上よ何なり手係り共なるべき品の取落しては有りもせざるや是等の事を糺さん爲呼出したる者なし此時左兵衛は頭を擧げお奉行樣に伺ひ升る庄兵衛夫婦を殺したる賊を直ちよお捕へと成る耳か此はと御吟味も相濟て近き内にぞ御所置になるやに承知致し升れど尚お調べ洩の事ありて御尋ねにも相成しかと恐る〳〵伺ひければ吉左衛門は進み出で如何にも賊を働きし石州浪士宮本なる者原田氏の調べを受ては服したるなれど未だ明白ならざる故に又々其方共を呼出せりと彦尾の申渡しを聞て名主庄兵衛は稍暫首傾けて居たりしがい奉行樣のお尋に思ひ出せし事のあり其節勝手の入口に取落しある財布の御座れば必す賊の所持せし者と私し方に取置たるが其夜の内に盗賊は如召捕と成たる傳に竟其品を差上ねど若し御用にもなるならば直樣取寄申さんと言上せしに彦尾は悅ひ其品疾く持參せよ必す手掛り共なるべき者と命を受て左兵衛は返り順ての事に持參せし財布を夫へ差出せば吉左衛門は手に取上如何なる物や入

しかと中なる品を取出せば骰子が二つに一通の文あり外に何も無く宛名は慥しき勘樣へでぞんじよりと有るのみなれど之扇竟の品なりと此日は殘らす引取せ其翌日となるが否小清水村を始め何ほ近村の戸籍帳を取集て自ら逐一改むるに勘と云ふ字を頭に付る名前は數多ありたれ共多くは老人小兒にして此と看認る者もなく何ほ繰返しで詠る内庄兵衛夫婦の籍面を不圖見當て改ひれば最早除籍の者なれ共前に養子と定めたる勘八と呼ぶ名前のありしに此奴は當時如何なる身分か事にも寄らば此者の所業なるやも圖られすと又候名主に初めとして全村の者を呼出し庄兵衛の養子勘八と云るは如何なる譯にて除籍せしか且又當時之何れに居るや其職業はやすよ及ばす平常の行ひに至る迄存知て居らば誰にても委敬言上致すべし屹度褒美を取らせんとやされ一同の村の族ど進み出て異口同音に陳るやう唯今お尋ねの勘八事は一旦庄兵衛の養子とせしが放蕩無頼の者にして色と酒とに身持を崩し其上ならす御法度の博奕のみを心掛一向意見も聞さる故庄兵衛夫婦も困ち果竟に勘當致してより最早六七年も過ますが昨年當人は折々に見掛し事も御座り升れど當時と何國に居り升るや其儀は存知申さすと始終の事を言上せしに吉左衛門は大ひに悅ひ一同の者へ褒美を取せ退散せしめて直樣に彌十郎を呼招き手掛りを得し事共を此に逐一物語れば田坂に於ても限りなく悅喜の眉を開きけり偖又原田軍次兵衛は日ならす宮本の所刑を爲んと源吾兵衛へも相通じ其心組にて在けるに吉左衛門の何やらか調ふる事の有るやよて書狀を贈りし事さへあれば處刑を急ぐ譯にもならす窃に樣子を探らしむれば左門之助を吟味もせす小清水村の者共を嚴重調ふる事を聞忽ち大ひに憤り一旦我等が吟味を遂罪に服したる宮本なるに亦庄兵衛を殺したる賊を探索致するからは左門之助を無失と見做す外に吟味の事あらば打棄置て宜けれ共夫には斯と明しもせす心懶き致

し方なり其儀ならば捨置難しと吉左衛門が出席の法廷に原田は推參なし面に怒色を現しながら一禮畢つて陳るやう拙者が調べし宮本を貴殿は無失と爲るゝか左もなき時は何故に小清水村を調べられしや其意を得さる貴殿の心底此儀をお尋申さん爲先推參せりと聞よりも吉左衛門は眼に角立這は心得ぬ貴所の一言に服罪した賊にもせよ拙者に於て調ふる事を彼是言るゝ聞れあし假令如何なる事の有り共貴殿の落度に成らざる樣取計はん所存なりしに咎られたる上からは爭か此儀默て居らんや抑庄兵衛を殺したる賊は宮本と思するや我等に於ては左門之助が所業なりとは存知申さす夫ゆゑ實の凶賊を捕へん爲の探索あるを詐も過言を申されたりと聞より原田は愈怒り現在罪に服したる賊を捨置外又賊徒の出る謂れなし萬一拙者が調べたる賊にあらさる其時は我一分の立されは切腹致して謝し申さん貴殿に於ては宮本の外に盗賊の出さる時は何を以て言譯せらるゝや如何にも庄兵衛を殺したる寇の賊を捕へぬ時は貴所に對して濟さる耳か上へも濟ぬ事なれば割腹致した其上に家名を沒收せらるゝ共曾て後悔仕らすと之より互ひに双方より書面を以て屆出れば長甲斐殿よも驚かれ太守へ斯と言上し兩町奉行の出願を聞屆られ其身も吟味の席へ着れたり此時彦尾吉左衛門は左門之助を呼出し先一通り相調べ軍次兵衛に打向ひ貴殿は最初宮本を召捕れたる其時より拷問のみに掛られたる由且又庄兵衛方に止宿を爲し其事柄をも調べ給はす其場に賊徒の取落せし財布一つの有りたるを余も御存知は御座るまじ是ぞ寇の盗賊が心周章て遺せし物なり御覽あれよと用箱の中より財布を取出せば軍次兵衛冷笑夫ある品があれば迚外に賊徒の有るといふ必ず証據に相成まじ是とて人を殺害し金銀衣類を奪ひたる左門之助の事なれば己れが身の上を逃れん爲に斯く計りし者かも知れず夫を何ぞや其元又は証據と爲して宮本を盗賊ならもとせらるゝか片腹痛し

しと嘲るに吉左衛門は大ひに怒り然らば不日其賊を捕へて貴殿の疑ひを必ず晴し申すべし迚此日之一同退散せり之より後之庄時も疾く寇の賊を召捕んと探索方を差出し百方拙八の行方を偵れ共更に手掛りを得さるより吉左衛門は工夫を旋し或日數多の罪人を殘らす法庭へ呼出し其方共の内よりして當時拙八の何國に居るや行方を存知て居る者あらば詳細言上致すべし褒美として誰にても罪の輕重を問はす直ちに許し放つべしと言聞されて囚人は互ひに面を見合せ居しが熊鷹傳次と云ふ賊が多くの中より進み出唯今お尋の拙八が居所を申上升もあら奈行樣のお情で命を助て下されと尚又前に這出るを吉左衛門は聞給ひ其方居所を存知て居るか疾々申上るべし命は助取せんと聞て傳次は打悅ひ其拙八と申する者は其實私が親分にて當時は大聖寺の片傍り柳が崎に居り升と申立しに吉左衛門は直樣田坂彌十郎へ捕縛の手當を命せられしに又悅ひは大方ならす自ら數人の手先を隨へ其地之出張ありたるが忽ち捕へて返られたれば直ちに法庭に呼出し嚴數吟味を遂られしに初めの内は白狀せされど最早遁れぬ處と悟り如何にも昨年霜月の初め庄兵衛方に能り越金を借んと無心をすれど一向聞入ぬ處より是非なく手込に持去んと立掛りし時盗賊と夫婦の者之騷ぎ立られ認められなば一大事と竟に夫婦を殺害あし逃去たるに相違御座なく早此上は如何樣なる嚴刑にても處せられ度と逐一白狀せしにぞ口書爪印も相濟せ其翌日と相成ければ長甲斐は申すに及ばす軍次兵衛も出席せしに吉左衛門は拙八を捕縛なしたる手續きより罪に服せし口書を示し貴殿は斯ても宮本を盗賊なりと爲給ふか汲答如何にと問ひ詰られ今更一言半句も無く默然として在りたる砌り左門之助が差料なる備刀を夫へ持出し又是迚も御存知なるべし先に不淨藏を改むるに此二腰の見へさるより爲と採偵を遂たる處城下の町に見當し故に出所の詮議を致せし處全く貴殿の注文にて拵へ

直しを致する由其もからの口書は斯此通り取置たり是のみならず其元には鈴木源吾兵衛の賊みを受左門之助を亡はんと手荒き拷問をせられしならすや鈴木は先に一郎と呼び豊後柞築に在る砌り宮本衛守を闇殺なし其後石州津和野に於て宮本謝解由を山中に鳥銃を以て討果し逐電致して隠跡を隠し當家に仕へて在る事を深く尋ねて左門之助は叔父と親との仇敵討んと遥々下りし事を源吾兵衛の疾くも聞知已れが奢惡を掩はん爲め密意を貫殿は引受て庄兵衛夫婦を殺したる賊に陥して亡はんと深く謀り給ひしならん已に鈴木は元老のお指揮を受て某しが疾くに縛め置たる耳か嚴重糺問を遂たる處遁れ難きを悟りて一伍一什の白狀せり斯迄顯に及ひし上は何を以て言譯あるや遮答あれと云ふ折柄上座に於て傍聽ありし長甲斐殿に左右へ下知あし原田の小刀を取上よと大聲を發し給ふを相圖に顯れ出たる若士が軍次兵衛を取めば早是迄と立上り帶たる一刀取より疾く彦尾吉左衛門覺悟をせよと大喝叫んで斫て掛れも數人の者に遮れ其場に於て擒と成しが奉行たるべき身を以て重々不埒の所業なり迚即刻切腹を申付られ家名は没收せられたり又凶賊の湖八は一旦父母となりし庄兵衛夫婦を殺害し金錢衣類を奪ひし科にて引廻の上磔の刑に處せられ又熊鷹の傳次に於ては一時大罪を免されて所拂ひと成たるが直樣惡事働きしに日數十日を出ずして再度捕縛となる耳か是又後日嚴刑に行とる偖宮本は此より先に吉左衛門の計ひにて數人の名醫が打寄りて内科外科共醫術を施し療を加へし事なれば三月上旬に至りし頃は再度壯健の身と相成氣力も本腹致せしに日柄を選て城外の廣場に高く矢來を設け警護の足輕五十人六尺棒を取て非常を戒め復讐の用意を爲しめたり左門之助と早朝より身支度嚴重に打扮て時刻を遅と待受たり鈴木源吾兵衛も惜すら休無く大刀腰に横たへて徐々現れ出たるが此日檢司として彦尾吉左衛門並に田坂彌七郎

欠

MISSING

吉左衛門は又宮本に打向ひ貴君も愛度本懐を遂せられたる上なればれ渡し申す御人あり受取れよと言なから妻に何やら申付れば程無く夫へ進出しは彦尾の娘に劣らざる最嬋娟たる美女なるに合点行すと宮本は夫なる婦人の面を見れば其身か豊後に在る砌り妻と定めし八重梅なれば遇は开も如何に夢なるか餘りの事と不審暫時詞も無かりしは實に尤と知れけり吉左衛門宮本の間近く進みて微笑つ其御不審は去る事なから先つ某しか是迄の始終を貴君へお話し申さん拙者が昨年秋の末公用に付て新潟へ出御役せし返り路悪漢共に取圍れ難儀せられて在れは其場を救ひて連歸り御世話を致し置たる處此はと當藩中の人々が妻に呉よと紹へすの言込矣も名良縁ならば兎も角と八重梅とのに尋し處津和野藩士へ嫁したる身もゑ未だ婚禮は爲す共他家へ嫁く身に非ずと操正しき御心底拙者も感服致せしか貴君も津和野の御藩士もゑ若しも貴名は御存知なるかと不圖お尋申せしに夫こそ良人と定めし人とお話し有て拙者も驚き斯も奇遇の不測なれ共まつ其元が今回の事件丼に敵を撃れし事迄大略お咄し申せしに八重梅ものにも夢なるかと喜はれしもお察し申す御遠慮あるな八重梅もの疾く御挨拶をせられよと自ら立て袖を取り左門之助の傍らに座せしめられて今更に嬉しさ哀しさ耻しさ先立者も涙にて傍の見る目も打忘れ唯泣伏て居たりしが漸く有て頭を擧け貴君にお別れ申せし後父將監は關の夜に人手ま掛りて果敢なき御最期其傍らに遇して有りし紙入の中まで塚原左源太と記せし名刺の有るか以て是と敵と見認し故夫より様子を探りし處其前父が他出の時出先に於て兵法の議論を以て塚原を大ひに戒め給ひし事の有りしと後にて聞出し夫を遺恨に父上を殺せし者と解りし故毋上様と諸共に貴君のお側へ参らんと手蔓を以て御様子をお尋ね申上たれは勘解由様にも人手に掛り御最期ありし耳ならす貴君も已ま仇討の願ひを上てお國を立退今は何國

に在すやら知れざる由の報知を得て又驚きは爲たあれと斯て有るへき事ならねは心細くも當
も無く諸國を巡り仇人を尋る旅中に母樣は美濃地に於て御持病發り竟に其地て歿去其時妾の
悲しさは俱に死なんと覺期を爲ど斯ては後にど父母の菩提を吊ふ人さへ無きに夫を思へは死
もならず處の者ゑ諫められ涙ながらに立出て其所此所と無く呻吟うち悲漠共の手に捕れ新潟
どやら云ふ處へ連て來られて遊女に賣渡さるゝ其折柄繩の邊を伺ひて遁れ出しが路さへ知れ
ず又も後より追掛られ再度手込になりし折彦尾樣に助られ厚きお世話を又ながら竟今日まて
居りましたと始終を明して宮本の行邊に伏て八重梅は涙に咽ぶぞ道理なり左門之助は夢なる
如く八年目にて不圖も不測の對面を致せし故歎ぶ事に引替て師なり舅の將監が横死の事に付
歎は塚原左源太と詳細聞て嚙を爲し其奴は先年某しが筑後久留米に在る砌り塚原方に逗留中
刃の中身を偷換られ知らず出立致せし後旅宿に於て心附取て返せば左源太は同國足代山へ罷
越門弟共を打集ひ野試合を催し有る由を留守居の者より承り其場に踏込多くの弟子等を斬
拂ひ刀は直ちに取返せしが塚原のみと手も負さず取逃せしを今以て遺憾なりと思ひ居たるに
又も其奴の手に掛り田丸殿ゑは御最期ありて最早此世に在さぬかと思ゑず両眼に涙を浮べ悲
歎ゑ咽ぶの傍らにて始終の樣子を聞居たる彌十郎は進み出某し最前より各位方の物語られた
るを聞に付お咄申す事の有り何を隠さん我等が實父は元和九年の秋の頃武術修行の爲として
當國金澤に逗留中我家へ屡出入をせられ竟には入夫となられしが二歳余り過る内設らしは某
しにて悅び給ふ程もなく母は產後に日立の惡く三十日を過ぬ内歿去れたる趣きなるが當時同
僚の甲乙が父の武道に優しを妬み讒言爲すも屡なるに後日の憂を逃れん爲亦銅作りの脇差へ
書一通を紀念に殘し遂に家出を爲れし由我等は祖母に養はれ稽人心を覺へし時金五十兩に雷

鳴を添見聞ぬ族人の届て行しに不測ながらも開封し書面の体を見る所先に家出をせられたる
我父上の書狀也る當時何れに在するやら樣子を聞んと馳出しが届に來る旅人の最早影さへ見
へざれば後で悔めど其甲斐なく倘は文体を讀見るに當時は田村將監と名乘未だ住居は定めね
共九州地方は先祖より住居致せし地なるを以て身を落付る心得云々と且又金子は某しへ學資
の爲に差贈ると厚き情の御書面なれは我等ゑ愈慕はしく成人の後に是非共に父子の名乘も
爲ん者と娛み居たる甲斐もなく勤る身分と相成ては他出も自由ならざる儘打忘しにあらね共
竟今日迄過たる所不圖父の横死を聞日頃の志願も此に絶へ落膽致せし拙者の胸中お察しあれ
と眼に涙浮べながらも八重梅の間近く進みて和女てそ腹は替れと我等が妹永の星霜父上のお
側に居りし者なれば我身の事も折々はお咄ゑても有りしなら物語られよと名乘られて又も吃
驚仰天し暫時は余りの不測さに詞も出す八重梅は顏のみ見詰て居たりしが忽ち下座へ飛下り
如何にも折々父上には未だ壯年の事あるが加州に於て或家の入夫となりし程もなく一人の男
子を擧しが妻なる者と產後に沒し面白からす在る砌り同僚中に不良者あり根もなき事を言立
て讒言爲すを知ゑより後日の難を遁れんため家出を致して後一度窃ゑ書狀を贈りし後は絶へ
て音信もせざりしが定めて成長せしあらん其時紀念の印にと殘し置たる脇差の其拵へは又銅
作り貫目は金の狂ひ獅中身は備前長光なるが最早當時は平常の差料にしても居るならんとお
咄ありしと屡々なれど妾を幼き頃なれと深くも同ひ置もせす唯今お話申たる事のみ覺居まし
たか其樣なら貴君が妾の爲に兄上樣で在しかお無媚と平伏て嘆し涙を催しけり此時彌十郎と
次の間より父の紀念手放さぬ小刀を持來り倘は疑のなき爲に宮本氏も諸共御改め下されと差
出されて八重梅と左門之助は手に取上中身は更なり拵へを改め見れは遲如何に今八重梅の申

せし如く少とも違ぬ脇差あるに互ひに目前の奇遇を怪み悅喜の眉を開く折何思ひけん彌十郎は横手を拍と拍鳴敵塚原左源太は日數數十日を出すして急度討取申すべし歡れよと聞よりも左門之助八重梅が开は如何なる事にして敵の所在を御存知なるか疾々仰聞されよと右左りより詰寄に彌十郎は莞爾と打笑實は先般大聖寺へ近き所まで出張し兇賊勘八を召捕たる其歸り路に拙者が師匠玉野左近と申する者に途中で面會致せし時塚原左源太猛虎とて隨分武術を心得たる當時浪士の身の上なるが仕官の望あるやにて尋ね越たる事のあり何へなりと世話してと師の依頼もに已むを得ず心急しき中なれど其在所をさへ聞置しが察する所亡父の靈魂自ら導き給ひしならんと物語られて二人は悅び彌十郎と討取べき手術を爰に談合せん扨又彦尾吉左衛門は思ひも依らず我家に於て夫婦兄妹の奇遇に驚き默然として居たりしが今又塚原左源太の所在も直ちに知ると云は此神佛の力を以て引合されしにあらずんは斯る不測之有るまじと又改めて酒宴を設け三人を茲に祝しけり其翌日に相成と彌十郎は宮本の宿所に來りて對面し我等も實父の仇あれ共父は家出をせらし人故今更敵と名乘もやらず且又御承知ある如く君へ仕る身の上なれは刃を取て向ふも難し何卒貴殿の武術を以て妹八重梅に力を添首尾能敵を討しめられよと萬事賴る方もなく世話を致して塚原の所在を委細示すにぞ左門之助と八重梅は天へも登る心地して其悅びは大方ならず直樣身仕度を充分あし能登國小田屋をさして乘込ける扨又田坂彌十郎は吉左衛門の計ひにて上へは病氣保養のため湯治の由に披露を致し後より連れ駈付來しが未だ宮本は仇討せす敵の樣子を伺ひ居たれば左源太を欺く手術を示し塚原方に趣きて其身の師たる玉野左近の書狀を出し仕官のお世話を致さん爲め推參せりと言込けれは直ちに面會を致す耳か大ひに喜悅の体なれば仕濟したりと詞を工み出して同道し人家を離れし松並木に差掛りたる其折柄待設けたる宮本は八重梅諸共走り出田丸將監の仇敵余も某しを忘れはせまじ筑後久留米に在る砌り足代山にて汝ぢのみ取逃したる宮本なり此なる者は田丸の娘八重梅にて俱不戴天の親の仇なるいざ尋常に勝負をせよと右左りから詰寄ければ今は遁ぬ左源太が片傍にありし彌十郎も俱に以前の事を說連出さんが其爲に玉野の書簡と僞りて此まで欺き出せし者あり最早遁れぬ汝ぢの一命立合しやと罵られ嚙を爲ど其詮なく早是迄と一刀を拔より早く斬掛來るに左門之助と八重梅に力を添へて立向せ竟に塚原を討しめたり夫より彦尾吉左衛門は首尾能復讐の濟しを悅び萬事自ら引受て檢視其他の事をも濟せ留萬歲を祝しける又藩中の人々は一度ならず二度迄も宮本の復讐を爲しに驚き或は武勇の優しに感じ是非共當家に仕へられよと勸る者の多けれ共一旦御辭退を致せしのみか未だ本國には母親もあり舊主の恩の藥難き事を申陳て固く辭し倘二月餘り逗留せしが斯て有るべき事ならねば互ひに別れを惜みつゝ亦の對面を約し此年秋の初め方八重梅は田坂彌十郎よりも利たる事を差添て石州へ送らしめ左門之助は歸路に立寄る所あるを以て後より金澤を發足しぬれば彦尾田原も國界まで見送り油屋忠兵工力士の者は尙ほ數十里を送り出しが其別るゝに臨み餞別なり迚許多の品々を贈り亦心利たる若者二人を御本國まで差添んと申出るも宮本は堅く之を謝絕し月日を重ねて播州姫路に到着し國老黑島左膳に會して先年の厚意を深く謝し其より四國に渡りて土州足摺山に到り小松翁に對面し北國に於て大難を逃れし事よなり本懷を遂亦翁の先見に違はず田村將監の仇敵再度塚原左源太を討し事より田坂彌十郎と八重梅兄妹なりしを物語り其他姫路の天守に於て妖狐を退治し亦奥羽廻歷の一伍一什を洩なく茲に物語れば翁に於ても屢々奇異の想ひを爲して只管左門之助が高運なるを祝し竟に四五日逗留致し暇を請ひ石

州津和野へ發足致しぬ亦職人大作は初め足輕なりしも非常の勳功あるを以て立身し山邊大之進と雖も宮本に別れし後上州高崎に於て仇を討しが此等は本編に關るべき履歴ならねば略す且又豫州松山の在高波村の農夫宇右衛門の倅宇作なる者も左門之助より惠れたる金十兩を資本となし言聞られし教訓を守り孝義怠りなきを以て十九才の時再度同村の名主と相成此より當家榮へしといふ亦宮本は津和野へ返り光蓮寺へ赴き八年目にて母子恙がなき對面に及ひ八重梅を改めて妻となし國侯に仕へ精心を盡し愛度星霜を送る内二人の男子を挙しより次男を以て田丸の家名を嗣さしめ一家殊さ親睦して子々孫々まで榮へしと云ふ

宮本左門之助武勇傳　大尾

明治廿一年十一月廿七日印刷
仝　年十一月廿九日飜刻出版　（定價五十錢）

發行者　大坂南區末吉橋通四丁目八十九番屋敷　中村芳松

印刷者　大坂東區高麗橋五丁目四十五番屋敷　大垣彌太郎

發賣所　大坂心齋橋北詰　競爭屋

2
8

特
5

091414-000-9

特12-568

宮本左門之助武勇伝

中村芳松

M21

DBN-2321